
キレイの魔法

春野桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キレイの魔法

【Nコード】

N1885A

【作者名】

春野桜

【あらすじ】

高校一年生の咲子は可愛くなりたいたいけどどうオシャレをしていいのかわからない、平凡な女の子。ある日学年一美人の美央に「キレイの魔法をかけてあげる」と言われ……。

プロローグ

結局、この世で女の子は二種類に分類されるんだと思う。

『可愛い子』と『可愛くない子』の二つに。

そして私は悲しくも後者の方で、それはどうにもならない事実なのだ。

可愛い子には資質があつて、可愛くない子には資質がないだけ……ただそれだけのこと。

——でも。それでも。

可愛くなりたいって思ってしまう。

神崎咲子、十六歳。とくに特徴も秀でるところもなく、平凡に過ごしてきた。

けれどある日突然、私の平凡な日常は変わった——そう、一人の女の子……山田美央によって。

1 出会いはトイレの中で

まんまるい輪郭。

小さい目。

低い目立たない鼻。

肩までしかない真っ黒なくせつ毛が、より表情を暗く見せている。

（か、可愛くない……）

朝のホームルーム前にトイレに行くのが私、神崎咲子の日課だが、手を洗う時にどうしても鏡を見てしまうこのひとときが嫌いだった。鏡は大ッ嫌いだ。

真実を何でも映してしまうから。

でも何よりも嫌いなのは、可愛くない自分の容姿だった。

（もっと美人に生まれたかったな……）

極上の美人とまでは言わないけれど、せめて人並みの容姿がほしかった。

多分メイクとかすればいいのだろうけど、今はまだ高校生だし必要ない。

……というか、やり方がよくわかんないし。

（まあいいや、私は美人になれない顔なんだもん。仕方ないよ）
癖になりつつある溜め息をついた。

……と、その時トイレに誰かが入ってきた。

朝のこんな早くからトイレに人が来るのは珍しかったので、私は思わず戸の方を見た。

同じクラスの山田美央さんだ。

クラス——いや、学年一の美人と言われている、私にとっては遠い存在の子だった。

「あ、神崎さん。おはようー！」

「お、おはよ…」

ニコツと笑った山田さんはとても可愛い。

クラスではあまり喋らない私にも挨拶をしてくれる山田さんは、とても気さくな女の子なのだ。その性格の良さは私も好感を抱く。けれどやはりもっと目を引くのはその容姿である。

長いサラリとしたストレートロングの髪。

真っ黒じゃなくかといって真っ茶過ぎないのがいい感じた。

そして柔らかそうな白い肌。

ぱっちり^{二重}の瞳。

ふつくらとした唇。

とにかくひとつひとつのパーツが可愛過ぎる。

どうして同年齢の女の子でこうも違うのか……神様は意地悪だ。世の中にはこんな人もいるんだなあ……自分とは違う世界の人って感じ。

そんな風に考えていると、山田さんは私の隣の洗面台の前に立った。ピンクとりボンがモチーフの可愛いポーチからくしを出すと、綺麗な髪にスツと通した。

どうやらトイレには色直しに来たみたい。

私は思わず山田さんの様子を見てしまった。

山田さんはくしで髪の毛を整えると、次に油取り紙を顔にあて肌を整え始めた。

そしてスポンジでパフパフと叩く^{はた}様が手慣れていて、私は感心してしまう。

（使ってる小物も可愛いなあ……一体どこで買ってるんだろ）

そんなことをぼんやり考えていたら、山田さんの手の動きが止まった。

「どうしたの？神崎さん」

「え、あ、その……っ」

しまった、ついついボーッと見てしまっていた！これじゃあ変な子じゃないっ。

私は慌てて話題を探した。

「そ、そのポーチ可愛いなって思ってた……ど、どこで買ったのかな……と」

拳動不審な自分が恥ずかしい……。

しかし、意外にも山田さんはパツと表情を明るくすると、嬉しそうに笑いかけてくれた。

「これね、お氣にの雑貨屋さんで買ったんだあゝ見付けた時運命感じちゃって！そう言ってもらえると嬉しいなあ、ありがとう！」

そう言った山田さんはとても可愛かった。そんな風に嬉しそうに話されるとこっちまでつい嬉しくなってしまう。

私はもつと話してみたくなくて、勇気を出してさらに話しかけてみた。

「その雑貨屋さんって、どこにあるの？」

「私の家の近くにあるの、北区よ。『Paradise』っていうお店なの」

「え、山田さん北区なの？私もそうだよ！」

「え！そーなの！？」

意外な真実が発覚して、私は思わず声を大きくしてしまった。

中学は違えど、同じ区内に私たちは居たらしい。

地元仲間の意識が芽生え、その後私と山田さんはトイレですつと色々なことを話した。

地元の話、授業の話、食べ物の話——でも私が一番興味をもって聞いたのは、山田さんのオシャレの話だった。

どこで服を買うのか、美容院はどこに行っているのか、メイクはどうしてるのか……一通り話し終えると、山田さんはこんな風に言った。

「なんだか神崎さんのイメージ変わっちゃった、オシャレには全然興味ないのかと思ってたから」

そう思うのは仕方ないのかもしれない。

私は照れながら言った。

「興味はないって言えば嘘になるけど……どうオシャレしたらいいのかわかんなくって」

なんだか気恥ずかしくて、照れ隠しに笑うと山田さんが柔らかに微笑んでくれた。

女の子相手だけドキツとなる。……いや、変な意味じゃなくて！——なんてことを考えていると、山田さんが唐突に言った。

「ねえ神崎さん、私が神崎さんの魔法使いになるわ」

「え？」

ま……魔法使い？

突拍子のない単語に私が首をかしげると、山田さんはさらに言葉を続けた。とても、楽しそうに。

「そう！これから私が神崎さんにオシャレを教えるわ！綺麗な魔法をかけてあげるの」

き、綺麗な魔法……。

砂を吐きそうなメルヘンな単語も、山田さんが言えば可愛く聞こえるから不思議である。

「だって神崎さん絶対可愛くなりそうだもん！私神崎さんをイメチェンさせてみたいなあ！ね、ダメ？」

「い、いや、ダメでは……」

それどころか、是非ともというのが本心だ。

つまり、オシャレの手解きをしてくれるんでしょう？そんなの、願ったり叶ったりだ！

「なら決まりね！今度の日曜空いてる？一緒に遊びましょうよ」

「え、あ、うん」

「よし、思いつき可愛くしてあげる」

あれよあれよの展開に戸惑いつつも、嬉しい気持ちに満たされた。昨日までは違う世界にいた山田さんが私に笑いかけてくれている。

そして、オシヤレを手解きしてくれるという。

なんだか、これからの生活に今までにないものが待っていそうで――私の心は高鳴った。

キンコンカーンコン……。

朝のホームルームの予鈴が鳴る。楽しい時間はひとまず終わりだ。

「あ、大変もう始まつちゃうね！行こう、神崎さん」

「うん」

トイレを出ると私たちは1、2の教室に向かって歩いた。

私たちの担任の峰倉先生（通称ミネさん）はいつも遅れて来るから歩いて余裕なのだ。

廊下を歩くと、時々男の子が振り返るのがわかる――山田さんがいるからだ。

ちらりと山田さんを見る。

……やっぱり綺麗。

そんな山田さんと話をできたのが嬉しくて、もっと話をしたくて、私はもうひとつ話題をふつてみた。

「そういえば山田さん、なんでトイレにわざわざ来てメイク直ししたの？」

普通なら他の子は教室で済ましてしまっている。

それか、トイレのついでにするかだ。

わざわざそれだけのために一人でトイレに来るのが珍しいような気がしたのだ。

すると、山田さんはきょとした顔で答えた。

「え、変かなあ？だってメイク直ししてるの教室で堂々とするの何だか恥ずかしくて……」

な、なんて可愛い答え。

この世には教室どころか電車の中でも堂々としている人がいるというのに……！

山田さんへのポイントはますます上がってしまった。

こんな子と仲良くなれて、ほんと良かった……。

高校一年生の六月、山田美央との出会いはこうして始まった。

——しかし。

その出会いがこれからの私の人生に大きく左右されるとは、この時は思いもしてなかったのである——。

2 スイート・シェイク

「え、つまりこのXに当てはまる公式というのは」

担任ミネさん（三十六才、男、独身）は数学の先生だ。

自慢のダミ声を教室中に響かせ、今日最後の授業を進行している。

（眠いなア……）

あふ……と欠伸を噛み殺していると、左隣から手紙が回ってきた。

ふと左横を見ると、一番窓際に座る山田さんが手の平をふっていた。ちなみに私は一番廊下側の席である。

可愛いハート柄の手紙にはこう書いてあった。

「明後日いよいよ約束の日曜日だね、もし今日良かったら一緒に帰る！日曜の予定について話したいな」

どうやら山田さんは本当に私にキレイの魔法をかけてくれる気がするらしい。

無邪気な手紙に、私の口元は思わず綻んでしまう。

ミネさんにはれないように、こっそり指でOKのポーズをし山田さんに伝える。

山田さんは笑ってまた手をふってくれた。

すると……。

「だからこの答えは……ん、山田どうした、質問か？」

「あ！いえ、違います！」

ミネさんにうつかり見付かってしまった山田さんに、また私の口元は綻んでしまったのだった。

「マックシェイクのバナラください」

「あ、私ストロベリー！」

そして放課後。

約束通り私と山田さんは一緒に帰り、駅前のマクドナルドに寄り道をした。

高校に入学して初めての制服を着ての寄り道だった。

「ん〜どこにしよう」

「山田さん、席あそこ空いてるよ」

少し混み合う店内の隅に座ると、私と山田さんはそれぞれのシェイクを手にとった。

ちなみにバナラが私でストロベリーが山田さんだ。

「ん〜やっぱストロベリーがおいしい」

シェイクひとつで幸せな顔になる山田さんはやっぱり可愛い。

私も今度ストロベリー試してみようかな。

「私はいつもバナラだなあ。そういえば前、バナラ頼んだら店員さん聞き間違えてバナナ味出して来てね、飲んでから気付いてびっくりしちゃった」

「あはは、そーなんだあ」

私の話題に山田さんが笑ってくれることがなんとなく嬉しい。

ひとまずお喋りを済ますと、山田さんが姿勢を正して話しかけてきた。

「さて、じゃあ日曜のことなんだけどね」

「う、うん」

少しだけ緊張してしまう私。キレイの魔法って、どんなのだろう…

…？

「まず美容院に行ってみない？神崎さん、もうちょい毛先すいたら可愛いくなると思うんだあ」

「び、美容院？」

「うん！あ、あと前髪も真ん中で分けるんじゃないかって、左か右分けにするとかしてもイメージ変わると思うなア」

「は、はあ……」

美容院……そういえばしばらく行ってないなあ。前行ったのいつだったの？

「あれ、乗り気じゃない？」

「あ、うつん。そういうわけじゃないけど……」

——ただ、ひとつ問題が。

それを口にするのは恥ずかしかったけど、言わなきゃならないことだったからうつ向きながら呟いた。

「お金、ないのが……その……」

月五千円の厳しい経済状況。

バイトもしていない私にとっては美容院代は命綱を切られてしまうようなものだった。

「親からはもらえないの？」

「うち厳しくて、美容院もあんまり高いともらえないから……」

今まで美容院には、お母さんが行く時について行って一緒に切ってもらっていた。だから一人で行ったことは一度もない。

あゝあ、私のオシャレ下手はお母さん譲りかなあ。

白髪を染める時にしか美容院に出向かない母を思い浮かべ溜め息をついた。

初っぱなからダメじゃん……。

——しかし、魔法使いこと山田さんはそこで諦める性格ではなかった。

「なら私のおにいちゃんに切ってもらわない！？」

「ええ！？」

驚愕した私になおも山田さんは楽しそうに提案してくる。

「私のおにいちゃん今専門学校行ってるんだけど、美容師さん目指してるの。まだ免許はないけど、もし神崎さんがいいならタダで切ってもらえるよ！」

おにいちゃんが美容師……（の卵）。

やはり家庭環境はオシャレにも影響してくるんだと、妙に感心して

しまった。

いやだって、美容師イコールオシャレな人って感じじゃない？

「で、でもいいの？お兄さんに迷惑じゃない？」

「そんなことないよ」むしろ喜ぶと思うよ？カットモデルがなかにかいないって困ってたし」

なんともうまい話だけど、山田さんのお兄さんを見てみたいと思う。

しかもタダ……。

遠慮と好奇心を秤にかければ、どちらに傾くかなんて量る前からわかってしまった。

「じ、じゃあお願いしようかな」

人間、好奇心には勝てないのだ。

「よし！ならおにいちゃんに言っとくね。日曜は外で待ち合わせてから私の家行こう！」

「うん、ありがとう。よろしくね」

日曜には山田さんの家へ行きお兄さんに髪を切ってもらう。

そう考えると、なんだか日曜日が楽しみで仕方なくなってきた。

ワクワクする気持ちは抑えきれず、バニラシェイクもいつもより甘く感じた。

キレイの魔法にかかったら、もっとワクワクできるのかな……？

その時だった。

「……はないよなあ」

「ああ、いかにも引き立て役だよなあ」

男の子たちの小聲。

ふいに、耳に飛びこんでしまった。

できれば、聞きたくないその声を……。

「美人とブスがそろつとやばいよなあ」

「え」と、なんて言うんだっけ？月とスッポン？猫に小判？」

「ばーか！猫は違うつちゅーの」
ゲラゲラと笑った男の子たち。

美人と……ブス。

……何よ。

それがどうしたって言うの。

事実なんだから仕方ないじゃない。

……でも、でも！

やっぱり言われるのは傷つく。悲しい。

美人とまでは言わないけど、少しでも可愛くなりたくて努力しよう
と思っただのに！

怒りと悲しみがミキサーにかけたみたいにくちゃぐちゃになった。
悔しいよお……。

しかし、次の瞬間。

「うるさいのよ、ブサイクども！」

突然立ち上がった山田さんの、キャラに似つかわしくない台詞に私
の思考回路は止まった。

——……へ！？

冷たい目で男の子たちを睨みつけた山田さんだったが、私に振り返
った時はいつもの笑みだった。

「行こう、神崎さん！シェイク美味しかったねえ！」

「え、あ、うん」

山田さんの勢いに押され私も席を立ちトレイを持った。

男の子たちはぽかんとそんな私たちを見つめる。

（ブ、ブサイクどもって……言っただけ！？）

少しだけ混乱しかけている私の手を、山田さんがぐいぐいと引っ張
って行く。

いつの間にかマクドナルドの店を出て、店員さんの無料スマイルに見送られていた。

外に出ると、山田さんはようやく手を離した。

その顔はうつ向いているけど、私よりも背が高いから表情は見てとれた。

怒りに満ちた表情だ。

（え、何で怒ってるの？）

私何か悪いことしたかな！？……と考えていたら、山田さんはそんな私に気付いて笑ってくれた。

いつもの、可愛い笑顔。

「突然出ちゃってごめんね、でもあいつたちにどうしてもムカついちゃって……」

「ああ、いいよ別に。だって私ほんとにブスだし」

あはは、と笑うと山田さんはキツと私を見た。意志の強い、キレイな瞳。

「そんなこと言っちゃダメ！いい？女の子は自分で可愛いって思っ
てなきゃ可愛くなれないんだから！魔法は自分でもかけられるんだ
よ！」

「自分……で？」

「そう！……神崎さんもあの男の子たちもわかってなさすぎだよ。
女の子は誰だって可愛くなれるのに……」

その山田さんの呟きに、私はドキリとなる。

誰でも……可愛く？

こんな、私でも？

「……ありがとう、山田さん」

——本当に山田さんは魔法使いなのかもされない。

だってたった一言で、私をこんなにも救ってくれたんだから。

思わずはにかんでしまった私を見て山田さんはどう思ったのだろう。
ポン、と手を打ってこんなことを言い出した。

「よし、気を取り直して今度はミスドでも行く？」

そのシェイクもなかなか美味しいんだよ」と笑う山田さんに、思わず私は大爆笑してしまった。

どうやら山田さんはシェイクマニアらしい。

うん、それもいいかもしれない。

ファーストフード店全部のシェイクを飲んじゃおう。そして、どれもが甘く感じたら。

きっと、私はその時可愛くなれるから。

決戦は明後日、日曜日。

私の運命が大きく変わる日は近かった……—。

3 幸せの黄色いキャミソール

——まず困ったのが、服だった。

一体何を着ていくべきか……ううん。

全身鏡の前で下着姿で悩む私。はたから見たらちよつと面白い光景かもしれない。

（山田さんちに行くんだからそれなりにオシャレしてかないとね。

いつも制服だから困るなあ……）

こういう時に可愛い服がないのは困る。

でもせっかく可愛くなる（あくまで予定、だが）のだし、ダサい格好はしたくない。

「あ、そうだ！確か黄色いキャミがあつたよーな……」

ふいに、前気まぐれでお母さんが買ってきてくれたキャミソールのことを思い出した。

フリルが恥ずかしくて一度も着たことなかったけど、私が持つ服の中では一番可愛いのだ。

「確か二段目に……あつたあつた！」

タンスの引き出しから例のキャミを取り出す。うん、やっぱり可愛い。

よーし、今日はこれを着てこうつと！

「下はジーパンでいっかな」

「なんだサコ。デートか？」

「なわけないじゃん、友達んちに行くだけよ」

……て、……ん？

この声は——！

「ちよつと稔みのる！何勝手に入ってきてんのよ！」

いつの間にか今年中学一年生になった弟、稔がいた。

小憎たらしい態度でずけずけと言う。

「いいだろ減るもんじゃなし。てかどーせサコの部屋だし」

「呼び捨てにするなって言ってるでしょ！早く出ていきなさいよお！」

稔は小さい頃から口達者で私はいつもからかわれている。

このひねくれた性格、誰に似たのかしら！しかも稔はクラスでモテモテらしいし……ほんとに私の弟！？

「友達って、高校のか？」

「そうよ！悪い！？」

「美人か！？」

興味深々に聞いてくる稔。……悪いけど、それは愚問だわ。

「……かなりね」

ふふん、と得意気に笑った私。お……と稔も感心をする。

「今度家に連れてこいよ、俺の女の一人にしてやる」

……つい最近までランドセル背負ってた子どもの言うことか！

でも実際いつもハーレムに囲まれている稔が言うから冗談に聞こえないのが怖い。

「馬鹿言わないでよ。てか、今私着替えてるんだから！出てよ！」

ぐいぐいと不満そうな顔する稔を部屋から追い出すと、ほ……と溜め息をついた。

ほんと、似てない姉弟。

（……山田さんのお兄さんは山田さんに似てるのかな？）

そしたらすごい美形に違いない。

またウキウキしてきた私は、黄色いキャミを初めて着た。

——素敵な日曜になりそうな予感！

爽やかな六月の風が吹く駅前。

高鳴る期待を抑えて駅前の時計に目をやる。

（十時ジャスト……もう来るかな？）

と、その時。

「神崎さん、お待たせ〜！」

山田さんが小走りにやってきた。

今日の私はカンがいらしい。

（うわ〜！私服の山田さん可愛い〜！）

白い膝丈のワンピース。

胸下のリボンラインがよりその可愛さを強調している。

羽織っただけの七分袖のボレロの黒色が、よりワンピースの甘さを際立たせていた。

まるで、雑誌のモデルさんみたい……。

「ギリギリになっちゃってごめんね、待ってない？」

「大丈夫、私も今来たところだから」

……実は早く来すぎて二十分位立ってたけど、恥ずかしくて本当のことは言えなかった。

「よかった。じゃあ行こうか！」

「うん」

こんなに可愛い山田さんの隣を歩くのは何だか気後れするかも……。私は少しでもドキドキしながら歩き出した。

駅から山田さんの家まで、歩いて十分くらいだという。

「それにしても今日は晴れて良かったよね、もうすぐ梅雨入りだから心配してたんだあ」

「う、うん。そうだね」

あれ、何だか緊張しちゃうな。やっぱり制服と私服じゃ雰囲気違うかなあ。

しかし、山田さんは変わらない笑顔で私に話しかけてくれる。

「神崎さんのそのキヤミ、可愛いね〜」

「ほ、ほんとに？」

「うん！黄色って好きだなあ。明るい色、いいよね」

そう言われて、私の緊張がふとほぐれたのがわかった。

山田さんは可愛くて、優しい。

「ありがとう。可愛いのがこれくらいしかなくて……」

照れながら言うと、山田さんはじゃあさ……と提案した。

「なら午後買い物しない？安くて可愛いお店紹介するよ〜！」

「ほんと？うん、行きたい！」

私は可愛い服屋さんなんて全然知らなかったから、紹介してもらえるのはすごく嬉しかった。

ほんとにいい子だなあ、山田さんは。

「あ、それと今の話とは全然関係ないんだけどね」

「？」

私が首を傾げると、山田さんははにかみながらこう言った。

「名字やめて、名前で呼び合わない？他人行儀っぽいし。私、咲子って呼びたいな」

咲子……稔が言ったらむかつく呼び捨ても、山田さんが言ってくれと途端に嬉しい。

私は笑って応えた。

「もちろんいいよ！えつと、じゃあ私は……」

「美央、て呼んで」

「う、うんわかった。み……美央」

今まで友達を呼び捨てにすることがなかったから、言う時にとても緊張してしまった。でも一度口にしたら、ぐっと山田さん……じゃなかった、美央との距離が縮まった気がした。

これも、魔法のひとつ？

「ふふ、そのうち呼びなれるよ。てか今日おにいちちゃんもいるし、山田さん……だどっち呼んでるのかわからないしさ」

「あは、確かにそーかも」

山田さん、と呼んで二人とも振り向く姿を想像して笑ってしまった。柔らかな初夏の風が、ふわりと吹いた。

美央の家は本当に私の家から近かった。学区が違うから中学は分かれていたけど、こんなに近所さんだったのかと驚いてしまった。小さな庭のある普通の一軒家。

私の家とそう変わりないつくりで妙に安心してしまった。

いやだって、美央のことだからテレビに出てくる豪華な家……ていう展開があってもおかしくないんだもん！

玄関の隅にある色とりどりの花は美央のお母さんの趣味らしい。

「どうぞ、入って」

「おじゃまします」

遠慮がちに玄関に入ると、くつを脱いで上がった。

中も、私の家とそう変わりはないかった。

——っ、ついに来てしまった！

ドキドキしながら立っていると、美央が大声で二階に続く階段に向かって叫んだ。

「おにーちゃん！友達来たよお！」

（っ、ついに美央のお兄さんが……！）

緊張が一気に高まった。

階段の奥から、男の人の声が聞こえる。

「んー、今行く」

トン、トン、トン。

階段を下りてきた美央のお兄さん。

（わ………格好いい！）

それは想像以上の格好良さだった。

まず目に着くのが瞳。美央と同じ、パッチリ二重なんだけど、切れ

長にも見える。

美央が甘い瞳なら、こっちはちょい辛って感じかな？

ずっと筋の通った鼻。端正な口元。

そして美容師を指しているだけあって、髪型も格好いい。

短めに切られた髪の毛は茶色がかっていて、ワックスかなんかで逆立ててある。

身長も高い……百八十あるかもしれない。

Tシャツとジーパンという普通の服装なのに、すごくオシャレに見える。

きっと、高い服なんだろうなあ……。

「おにいちゃん、この子が神崎咲子ちゃんだよ。咲子、おにいちゃんの山田信也」

「は、はじめまして！よ、よろしくお願いしますー！」

私は深くお辞儀をした。

こんなに格好いい人に髪を切ってもらえるなんて……どうしよう！……いや、別に何があるってわけでもないが。

しかし。

「こりやまた……だせえの連れて来たな」

私の胸の高鳴りは。

「お、おにいちゃん！？」

一瞬にして碎け散った。

——はい？

私はポカンと美央のお兄さん——信也さんを見上げた。

「髪は重くて暗いし背もちまいし。こりやいじり甲斐がありそうだ」

——な、な、な。

（なんて失礼なやつなのー！！）

私の怒りバロメーターは一気にマックスになった。

「ちよつと、失礼じゃないですか！」

「そうよおにーちゃん！咲子に謝ってよ！」

「何だよ、ほんとのことだろー？」

「ぼ、ほんとのことでも言っていていいことと悪いことが……っ」

「そーよ！そーよ！」

「ははは、元気がいいお前ら」

呑気な信也さんの台詞に、ガクツと力が抜けた。

こ……この人、稔に似てる……。

容姿はともかく、この性格。自信に満ちて私を見下してる感がそっくり……。

「えーと、咲子ちゃんだっけ？」

「は、はい」

突然呼ばれ緊張してしまう。

「まあ今日は俺がとびつきり可愛くしてあげるからさ。よろしくね」
にこりと笑った表情に思わずドキツとなる。

あんなひどいこと言われたのに……もー！美形ってなんて卑怯なの！？

「よ、よろしくお願いします」

悔しさと緊張をごまかすため大きな声で言つと、信也さんはまた笑った。

——あ、美央に笑い方そっくり……やっぱ兄妹なんだなあ。

そんなことをぼんやり考えていると。

「でもキヤミは可愛いしよく似合ってるね。好きだよ、そーいうの」
あまりにもさらりと言われた誉め言葉に、私の顔は真っ赤になった。

「あー！おにいちちゃん咲子に毒牙かけないでー！」

「何言つてんだ、ほんとのこと言っただけだろー！？」

……こ、この人って。

思ったこと何でも言わなきゃ気が済まない人なんだ……。

なんだか信也さんのキャラがわかりかけてきた私は、これからの展開にどう期待していいのかわからなくなった。

魔法使いの兄は同じように魔法使いなのか——それとも。上った階段の先にその答えはある。

私は胸を張ってキャミソールを強調すると、美央たちの後に続いて階段を上り始めた。

4 フォーレスト・マジック

案内されたのは信也さんの部屋。

男の人の部屋に入るのは生まれて初めてだったので、部屋に一步踏み出した途端私はどう動いていいのかわからなくなった。

「美央、お前の友達銅像になってんぞ」

「咲子、どうしたの!？」

「え、あ、いや……!」

だ、だってなんか緊張しちゃうんだもん!

私はそわそわしたまま部屋の中を見回した。

(私の部屋とは全然違う……)

なんていうか、色が少ないって感じかな。

置いてあるものはベットやタンスなど私の部屋とはなんら変わりはないんだけど、どれもがシンプル。

ただ美容師を目指しているせいか、ハサミやくしが沢山あるし、マネキンの首のみのもの(名称なんて言うんだっけ?)を見た時はぎよつとした。

そして。

「咲子ちゃん、こっちに座って」

部屋の中央に用意された全身鏡と椅子。

下にはシートがひかれ、傍らにはミニワゴンが置かれドライヤーやハサミ、くし、スプレーなどが揃っていた。

即席美容室だ。

「は、はい」

——私のためにこんなに準備してくれたんだなあ。

そう考えると、とてもありがたく思う。

私の髪を切るなんて一昨日決めたばかりで突然だったのに、快く引き受けてくれた信也さんは根は優しい人なんだろう。

ただ、思ったことをずばつと言うから誤解を招きやすいんだろうなあ……。

椅子に座った私の後ろに信也さんと美央が立つ。

「咲子緊張しないでね、おにいちゃんこう見えてもクラスじゃ優秀なんだから！」

「んーこう見えてもは余計だな」

そう言つて信也さんは私の髪に手をかけた。

（わ……！）

スツと私の髪を撫でる。

——なんだかくすぐつたい感じ。

静かにドキドキと心臓が鳴り始める。

「少しくせつ毛だなあ。髪質は柔らかめ……ちよつと細いなあ」

「いいなあ、私髪太いから柔らかいの羨ましい」

「美央の髪も可愛いよ、サラサラのストレートは男受けすんだぜ」

「えー、おにいちゃんに言われてもなあ」

楽しそうに談笑する美男美女の兄妹。

鏡に映る自分の背後が眩しくて、正面を向くことができない。

「よし、じゃあ早速取りかかるか！」

突然パン！と信也さんが手を打ったので、私の肩はビクツと揺れてしまった。

「本来ならシャンプーとかするんだけど、今回は水でサツと濡らしてから切るね」

ポンポンと私の頭を叩く信也さんの手。大きくて、ゴツゴツしてる。

「……と、タオル用意してなかったな」

「あ、私取つて来るよ」

美央がそう言つて部屋を出ようとする。

（え！美央行っちゃうの！？）

ま、待つてー！……と言えるはずもなく、美央は笑顔で部屋を出ていった。

パタン……と閉じた部屋の中に、私と信也さんだけが残る。

（え、ええ〜と、どうすれば……）

やや緊張した私の表情を、多分信也さんは読み取ったのだろう。また私の頭をポンポンと叩く。

「まあそんな緊張なさんなって」

「す、すみません！」

年上の男の人と話すことなんて滅多にないから、どう振る舞っているのかわからない。

しかも信也みたいに格好いい人なんて接したことないし……っ。

まだ緊張で固くなっている私の後ろで信也さんがくしを取り出す。そのくしで私の髪をとかしながら、信也さんは鏡の中の私を見つめた。

「咲子ちゃんもしかして好きな人いるの？」

「え、い、いませんよ！」

いきなりの質問に私はぶんぶんと手を振る。

まさかそんなことを聞かれるとは思わなかった。

「そう？だって可愛くなりたい子がいるって美央言ってたから。可愛くなりたいのは好きな子がいるからじゃないの？」

手を休めることなく信也さんは言う。

でも実際私には今好きな男の子はいないのだ。

私は可愛くなりたい——それは事実。

その、思いの底にあるものは……。

「可愛くなれたら……自分が好きになれる気がして」
ぽつり、と呟いたその言葉。

それはまだ美央にも話したことのないことだった。

「私……こんなだから自分に自信なくて。オシャレしたいけど、どうしたらいいのかわかんないし。そんな時に美央に会って……キレイの魔法かけてあげる、て言われて」

そう言ってくれた時の美央の笑顔を思い出す。

そう、あの時から私の運命は変わり始めたんだ……。

「キレイの魔法？」

信也さんがきよんとする。

——あ、ひかれた！？

さすがに男の人はこんなフレーズひくよね！？

いやでもこれ、美央の言葉だし……っ！

しかし次の信也さんの言葉に、私の方がひいてしまった。

「何だ美央のやつ、俺の台詞盗みやがって」

……え？

……ええええ！？

「し、信也さんが言ったんですか！？キ、キレイの魔法……って！」

「ああ、そだよ。俺が美央に言ったんだ」

い、意外な事実……！

いやでも、信也さんなら言いかねないかな？

「いつ頃だったかな」あいつが小学五年生の時だっけかな？そんな時

あいつブスでさ俺が魔法かけてやったんだ」

え……美央が！？

「好きな人ができたからキレイになりたいって。そんな時俺は既に美容師目指そうと思ってたからメチャ力入れて可愛くしたね！そんな時にあいつにいつも言ってたのが『キレイの魔法』だったわけ」

「そ、そうだったんですか……」

衝撃の新事実だ……！

美央が元からキレイだと思ってた私にとって、その話はすごく驚いた。

でもなんか、自信持ちちゃうなあ。私でも、可愛くなれる可能性があるわけだね？

『女の子はね、自分で可愛いって思ってなきゃ可愛くなれないんだから！』

——卑屈になる私に言った美央の言葉。

あの言葉は、もしかしたら自分自身への言葉でもあったのかもしれない……。

「二人ともお待ちせー！ついでに飲み物も持ってきたよ！」
噂をすれば影——とはよく言ったもので。

ちょうど美央がタオルを腕にかけ、両手でトレイを持って部屋に入ってきた。

「やけに時間かかっていると思ったら飲みモン用意してたのか、サンキュ」

「どういたしまして」

ニコニコ笑いながらジュースを配る美央はとても可愛い。

——でも私はもう知ってしまった。

この可愛さが、本人の努力によってできたものだってことを。

美央への憧れと尊敬は、ますます私の中で強くなった。

「はい、咲子。アップルでよかった？」

「う、うん。ありがとう」

可愛い美央。

私もこんな風になれたら……——。

「さて、咲子ちゃん切るから動かないでね」

タオルとシートで切った髪が私の体にかからないようにすると、いよいよ信也さんはハサミを手を取った。

「は、はい！」

——いよいよ始まる、信也さんの魔法。

傍らで見守る美央は私に大丈夫だよ、て笑いかけている。

私も美央みたいになりたい。

自分に自信を持てるくらい、可愛く——強く。

魔法の第一歩が、始まった。

4 ふぁーすと・マジック (後書き)

評価してくれた方々どうもありがとうございます！アドバイスを踏まえて、これからも頑張りますのでお付き合いしてくれたら嬉しいです(^ - ^) さあ、咲子はこれからどうなるのか……！？

5 ポンポン叩く手のひら

分け目が右寄りのミディアムヘア！。

毛先は軽くすかれ、重たい雰囲気はもうない。
しかも。

眉カットまでされ。

メイクまで施されてしまつて。

費やされた時間はおよそ二時間半。

できあがった時には『誰これ……！？』というくらい別人の顔が鏡に映っていた。

「……咲子かわいい」……」

ほう……と溜め息をつく美央。その表情には驚きと嬉しさが表れている。

「うーん、俺自身も驚いたな。まさかこうも化けるとは」

信也さんも美央と似たような表情で鏡の中の私を見ている。

でも、一番驚いたのは……。

「これ……わ…私……？」

誰よりも、自分自身だった。

鏡の中に映る自分を何度も何度も凝視する。

——すごい……すごいすごい……！

ヘアカットとメイクだけでこんなに変わるなんて……！

最初は驚きだけだった。けれどその後一気に喜びが私の心を満たした。

「信じられない……これ、私!？」

「正真正銘、咲子ちゃんだよ」

魔法の感想はいかが?と、魔法使い……もとい信也さんが私に微笑みかける。

私の胸の高まりは、どんどん高まっていく。

「あの、その、何ていうか……は、恥ずかしいですっ」

「恥ずかしい?何で?」

「……じ、自分の顔がまともに見れませんっ」

全然信也さんの問いに答えてない私の言葉に、信也さんはとうとう吹き出した。

「あっはっは……!咲子ちゃん面白いなア!」

「もゝ咲子可愛過ぎるうつつ」

ぎゅうつと美央が私を正面から抱き締めてくる。

可愛い美央に可愛いって言われるのは、すごく嬉しい。

私の顔を覗きこんだ美央の瞳は、キラキラ輝いている。

「ね、咲子!この後私の服でコーディネートさせて?今の咲子に色々着せてみたいのゝっ」

「お、そりや楽しそうだな。にいちちゃんも混ぜろ」

「ええゝおにいちちゃんのえっちい」

「何でそうなるんだ!？」

まるで漫才のような二人のやりとりに、ただでさえ嬉しさで笑っていた私はますます笑ってしまった。

——ありがとう。美央、信也さん……!

その後デリバリーピザ(いつの間にか美央が注文していたのだ)で昼食を済ませると、私は美央の服を色々と着せられてしまった。

美央の服はどれも可愛いくて、着ている私も楽しくなってしまった。美央も『着せ替え人形みたい』と笑いながら、楽し気に服を引っ張り出しては私に着せていた。

そして着るたびに信也さんに見せ、『白のインナーのがいい』だの

『こっちのスカートのがいい』……と評価を頂いていた。
そんなこんなで時間はジェットコースターのように過ぎ、いつの間にか夕方になってしまったのだった。

「咲子、ごめんね。ショッピングする時間なくなっちゃって」

「ううん、いいの。すごく楽しかったし。ショッピングはまた今度にしようね」

時間は午後六時。

玄関で二人に見送られながら、私は最後の挨拶をした。

「美央、信也さん。今日は本当にありがとうございました」
ぺこつと頭を下げると、頭をポンポンと信也さんが叩いた。

「そんなに改まるなよ、照れるだろ」

どうやら信也さんは私の頭を叩くのが癖になってしまったようだ。
ちようどいいとこに私の頭があるからだろう。

私はニツコリ微笑んだ。

「それじゃあ私、失礼します。美央、また明日ね」

「うん、バイバイ！……おにいちちゃん、咲子頼んだよ！」

美央は少しだけすまなそうな顔をする。

私を駅まで送っていきたくたらしいが、塾がこの後あるので美央は行けないのだ。

けれどその代わりに、信也さんが送ってくれるという。

私は別にいいって、言ったんだけどなあ。

「おう、任せとけ！」

手を振る美央に見送られながら私と信也さんは玄関を出た。

「さ、行こうか咲子ちゃん」

「は、はい」

前までの私なら男の人と二人で歩くななんて、緊張しまくりだったろう。

けれど信也さんは私を変えてくれた魔法使いの一人。

少しか緊張はするが、私はすっかり心を許していた。

美央と来た道を、信也さんと逆に歩いて行く。

夕焼けは赤く染まり、信也さんの髪の毛も部屋の時より赤く見えた。信也さんの横にいと、ちょうど私の顔は信也さんの胸らへんになつてしまふ。

多分身長差は三十センチくらいあるに違いない。

だからもちろん足の長さも違うわけで……私は信也さんの歩くスピードに必死になつた。

「それにしても、ほんと咲子ちゃん可愛くなつたなあ。変えた俺自身驚いたよ」

「そ、そうですか？」

慣れない早足に気をとられつつも、信也さんの言ってくれた言葉に私はとても喜んでしまつた。

「うん！……でさ、ひとつ頼みがあるんだけど」

「頼み……ですか？」

信也さんから何を頼まれるんだろう。

きよとんとした私に、信也さんは言葉を続ける。

「良かったらでいいんだけど、これから時々俺のカットモデルになつてくれないかな？」

「え、でも、切つたばつかですよ？」

「伸びたらでいいよ。あと、パーマかけたいとか色染めたいって時も俺に声かけてよ。いつでもいいからさ」

ニコリと笑う信也さんに私は慌ててお礼を言う。

「あ、ありがとうございます！今日こんなにしてもらつたのにこれからもだなんて……っ」

「おいおい、頼んでるのは俺の方だよ？しかも練習台になつてほしいなんて頼みだし」

苦笑する信也さん。

でも、私は本当に感謝の気持ちでいっぱいだったの。

「れ、練習台でもいいんです。魔法……これからもかけてもらえるのなら」

そう言った私の顔はきつとだらしく笑っていたに違いない。けれど信也さんは目を細めると、またポンポンと頭を叩いた。

「ありがとう、咲子ちゃん……っあ！」

「きゃっ」

——と、その時私の体が傾いた。

早足で歩いていたせいで、まぬけにも自分の足にひっかかってこそうになってしまったのだ。

しかし信也さんがすかさず私の体をキャッチしてくれたので、最悪の展開にはならなかった。

信也さんはたった一本の腕で、私の体を支えてしまった。

「大丈夫！？咲子ちゃん」

「は、はい、すみません！」

信也さんが近くて、ついつい顔が赤くなってしまふ。

し、信也さん意外と筋肉質なんだなあ……。

「……あ、もしかして俺、歩くの早かった！？」

信也さんは私の安全を確認すると、思いついたかのようにそう言った。

……その通りなんだけど、はっきりとは言えないのが私の性分。

「いえ、そんなことは……」

「ごめん！俺、ほんとそういうこと気付かないやつで！」

信也さんは本当にすまなそうに、両手を合わせて何度も謝る。

「まじでごめん！……はあ、俺ってダメなやつだよなあ」

溜め息をついた信也さんはポリポリと頭をかいた。

なんだかすごく落ち込んでいる。

ど、どうして？

「信也さん……どうしたんですか？」

歩くスピードが早いのに気付かなかっただけで、こいつも落ち込むものかな？

不思議に思った私に、信也さんはバツが悪そうに苦笑する。

「いや、俺あんま気いきかないやつだろ？この性格でフラれてばっかなのに、治らねえなあ……と自己嫌悪なだけ」

苦笑いする信也さんに、私は驚いた。

「フラれてばっか！？信也さんが？」

こんなに格好いいのに！

「俺思ったこと結構ズバツと言っちゃうだろ？んで、やれデリカシ
ーがないだの気がきかないだので結局フラれるんだよなあ……。ま
あ悪いのは俺だから仕方ないんだけどさ」

「……確かに信也さんはつきり言いますよね。今日も初対面が『だ
せえ』だったし……」

「わくくご、ごめん！ごめんなさい！！」

慌てる信也さんに笑ってしまう。

……なんか、可愛い。

「でも、いいんじゃないですか？それで。私は思っても言えないこ
とが多いから、逆に羨ましいくらいです」

考えてみると、信也さんと私の性格って真反対かも。

「そうかな？こういう男、女の子は嫌がるもんじゃない？」

「私は嫌じゃありませんよ。むしろ、魔法をかけてもらえてすごく
感謝してるんです。今まで信也さんをフツた人は、きっと見る目が
なかったんです」

信也さんを見習って、思ったことをなるべく言葉にしてみた。

信也さんには本当に感謝してるから、その気持ちを伝えたくて……。

「い、いい子だなあ！咲子ちゃん！」

どうやら私の気持ちは伝わったらしく、信也さんはぐしゃぐしゃと
私の頭を撫でた——というより乱した。

（ああ！せっかくのセットが……）

しかし感動してしまった信也さんは更にわしゃわしゃと頭を乱す。

「美央が咲子ちゃん大好きな理由わかった気がするぜ」

「あ、あの、髪が……！！」

「お、悪い悪い！」

信也さんは慌てて髪の毛を直す。

なんか信也さんて、年上なのに子どもみたい。

年は三つ上って聞いたけど、同じ年の男子よりよっぽど喋りやすいや。

そんなことを考えている間に、信也さんの手は乱れた私の髪の毛を直していく。

信也さんの魔法の手。

大きくて……温かい。

(……あ、あれ。何か緊張してきちゃった)

髪の毛に触れられているうちに、徐々にドキドキしてきてしまった。多分、男の人に触れられることに慣れていないせいだろう。

……でも。

それにしては緊張しすぎているような……っ。

「よしっ……と。じゃあ行こうか咲子ちゃん」

「あ、は、はい！」

私はハッと正氣に戻る。

何ポーズとしてるの、私ったら……っ。

「今度はちゃんとゆっくり歩くからね」

「あ、ありがとうございます」

信也さんはまたきちんと私の横に並ぶと、小さく足を踏み出した。慣れない気遣いが可愛くて、私は笑ってしまった。

夕焼けの帰り道。

たった十分程度のその道は、信也さんとの楽しい時間を満喫するには短すぎたみたいだった。

駅に着いた時、私は少しだけがっかりした。

家までじゃ悪いと思って駅まで……って言ったけど、やっぱり短かったなあ。

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「はい」

「可愛くなったから、ますます心配になるなあ」

「し、信也さん……」

これは多分、冗談よね？

苦笑いする私に、信也さんはまたしても私の頭をポンポンと叩いた。
くすぐりたい、不思議な感触がどうやら私は嫌じゃないみたい。

「またね」

「はい、さようなら」

さようなら、信也さん。素敵な魔法をありがとう。

信也さんと別れると、私は家に向かって歩き出した。

春の柔らかい風が私の頬を撫でた。夕焼けの空にはそろそろ星が姿を現そうとしている。

いつもと変わらない日曜日。

でもいつもとは違う日曜日。

私は頭に何度も感じた温もりを思い返しながら、家路を歩いた。

家族はこの姿見てなんて言うかな？

びつくりするかな？

稔はからかってきそうだけど……。

私は一人笑いをこらえながら、家路を急いだ。

——こうして運命の日曜日は、終わりを告げた。

そして。

私の平凡な生活が、たちまち変わっていくことを……この時はまだ知る由もなかったのだった。

6 乙女のシビアな事情

キンコンカーンコン……。

ざわめきだす教室。

席を立ちお喋りし出す生徒たち。

放課後のいつもの風景の中、私も帰り支度をしていた。

——魔法をかけられてから一週間が経っていた。

メイクがまだ上手くできない私は、今日美央に誘われてコスメショップに寄り道することになっていた。

私はメイクは別にまだ高校生だし、そんなに必要ないと感じていたのだけど……。

『せっかく可愛くなったのに、ノーメイクなんてもったいないよう

！』

……と美央が言うので行くことになったのだ。

(……でもなあ)

実は、今日の寄り道は気乗りしないのだ。

別にメイクが嫌とかじゃない。むしろ、私ももっとメイクのこと知りたいと思う。

でも、のっぴきならない事情を私は抱えていた。

それは……。

「咲子！準備できた？行こう！」

「あ、う、うん！」

美央に呼ばれ私はハッと我にかえる。

ターコイズの付いたコンコルドで髪をまとめた美央は今日も可愛い。私も前よりはだいぶましになったとは思っけど、美央のようになるにはまだまだ道のりが長そう……。

「あのねえ、そのコスメショップすごい品揃えいいんだあ！オリジナルコスメとかもあったし時間忘れてついつい長居しちゃったんだ」

「へー、なんか楽しそう」

私たちは途中の駅で降りると、美央の案内で目的のコスメショップに向かった。

私の家と学校の間にあるこの駅は、美央いわく可愛くて良い店が多いらしい。

この辺では買い物もできるくらい色んな店がある、結構栄えている駅だ。

しばらく歩くと目的のお店に着いた。

外観は白と赤で色鮮やかな印象を受けた。

どうやら、コスメ以外にも小物も売っているみたい。

お店の看板には『コスメショップ LALA』と書いてあった。

「さ、はいろ」

「うん」

自動ドアをくぐりぬけ店内に入ると、売り物のコスメや小物が可愛く配置されていた。

外観の赤と白のデザインは、内装にも使われている。

「わーすごい…」

「このお店ちょっと変わっててね、普通メーカーごとにコスメって配置されてるんだけど、ここはリップはリップ、マスカラはマスカラって種類ごとに置いてあるんだ。中には見にくいって言う人もいるけど、私はこっちのが見やすくてスキなんだあ」

「へえ」

言われてみると、リップがずらりと並べられているコーナーもある、マスカラばかり並んでいるコーナーもある。

確かにあまり見ない配置の仕方もしれない。

「よし、咲子何見たい？」

ウキウキしたように聞く美央に、私はええと……と答える。

「まつげカールさせる道具とマスカラがほしいかなあ」

雑誌で研究した結果、アイメイクがやはり一番力を入れるべきポイントだと学習した私は、アイメイクセットを揃えることにした。

目が変われば顔の印象もだいぶん違う！……らしい。

「ビューラーとマスカラね！それならアイライナーとアイカラーも見てみようよ」

「う、うん！」

美央の勢いに押され、私もなんだかワクワクしてきてしまった。

コスメをまさか選ぶ日が来るなんて、数週間前には考えてさえいなかったのに。

——が、しかし。

（ええ！マスカラ下地がいるの！？）

（うわ！アイカラー思ってたより高いっ）

（あゝこれ可愛くてほしいけどこの値段は……）

のつぴきならない事情に、案の定私はつまずいていた。

——そう、私のその事情とは……経済事情。

中身の薄い財布でコスメが買えるかどうか不安だったけど、やっぱりその予感は的中していた。

「ねーこのマスカラ良さそうだよお！カール力が強いって！」

……と言って美央が薦めてきたマスカラは二千五百円。私の昼食代何日分さ！？

安いの中にはあるけど、アイメイク道具全部揃えたら結構かかりそう……。

こりゃ絞って必要最低限のものを選ぶしかないなあ。

オシャレにはお金がかかる——それは仕方のないことかもしれない。
「私これ買おーっと！」

美央はお店のカゴに次々と商品を入れていく。私のは空っぽなのに

……。

「ねえ、美央」

「ん？なあに？」

「美央って何かバイトやってる？」

「でなきゃ、こんなにバンバン買えないよね？」

ふと聞いた質問に、美央はにつこり答える。

「うん！高校入ったと同時に始めたんだ。カフェで働いてるよ」

「やっぱり……」と思ったと同時に、私はうーんと考えた。

「私もバイトやろうかなあ。これから色々と買いたいのあるし、お小遣いだけじゃまかなえないや」

ただし、親がOKしたらの話だけど。

私がそう呟くと、美央の顔がパツと輝いた。

「なら私のところでバイトしようよ！咲子も一緒なら私も嬉しいし」
うん、そっちのが私も助かるなあ。

けれど次の瞬間美央はハツと何かに気付いた。

「あ……でももしかしたらダメかもしれない。バイト募集この前締め切ってたから……」

「え、そうなの？」

それじゃあ美央と同じここではバイトできないかあ……。

「あ、でも店長に私から頼んでみよっか？」

「ううん、無理言っても悪いし他のとこ探してみるよ」

「そっかあ……ううん、残念！」

私も残念だけど、やっぱいつまでも美央に頼ってばかりじゃダメだよな。

——信也さんに魔法をかけてもらったあの日以来、私は積極的に自分を変えようと意識していた。

以前は変わりたいとは思っても、動こうとさえしなかった。
でも。

美央にぐいぐい引つ張られるうちに。

信也さんにどんどん変えられているうちに。

私も動かなきゃって。

自分自身の気持ちを変えなきゃって。

——そう思うようになったの。

それもこれも全部、美央と信也さんのおかげ……。

（そういえば信也さん、元気してるかなあ）

一週間前に会って以来、当たり前だけどずっと会ってない。

何だか、懐かしいなあ……。

「あ、おにいちちゃんとこならどうかかな!？」

「え!？」

突然美央がそんなことを言ったから、思わず大げさに驚いてしまった。

み、美央タイミング良すぎ!!

ドキドキ……と心臓が鳴ってしまふ。

いや、それよりも、信也さんどこ……って?

「し、信也さんどこ?」

「うん!おにいちちゃんもバイトしてるからそこかは?」

「で、でも信也さんに迷惑が」

「も」咲子ったら遠慮し過ぎ!私と咲子の仲でしょ」

いや、この場合私と信也さんの仲を考えるべきでは!?

しかし美央が決めたなら一直線な性格だということを知っている私には、美央の勢いを止めることはできなかった。

結局、この後美央の家に寄って信也さんに話を聞くことになった。

でも信也さんに会えるのは……正直嬉しい。

恋愛感情とかではなく、純粹に信也さんの人柄は好きだから。

何でも正直に言っちゃうとことか。

意外と気を遣う性格とか。

大きく笑う仕草や、私の頭を叩くこつい手のひらとかが……——。

（なんか、好きだなあ）

この、信也さんに対しての穏やかだけどちょっとドキドキする気持ち

ち……何なんだろう？

結局、私はビューラーとマスカラとピンクのアイカラー（どれも安いけど……）を、美央は例の高いマスカラとチークとマニユキア数本を買った。

美央の家着いたらマニユキア塗りあいっこしよう！……てことになったけど、私上手く塗る自信ないよお。

でも、買ったコスメよりもこれから信也さんに会うことばかり気になって。

美央の家に着くまで、私は何度も鏡チェックをする羽目になったのだった……。――。

「初めてはピンクネイルで」

ローズピンクにターコイズブルー。

パールホワイトにラメ入りオレンジ――。

色とりどりのマニキュアボトルに囲まれて私と美央はネイルを塗っていた。

信也さんはまだ外出中ということだったので、帰ってくる間マニキュアを塗ろうということになったのだ。

初めてのマニキュアに苦戦しながらも、なんとか私は両手に塗ることができた。

淡いピンクのエナメルネイルだ。

「わー可愛い……」

自分の両手を目一杯広げて見てみると、指先がキラキラ輝いて見えた。

オシャレって、不思議。

ちよつと爪にマニキュア塗っただけで、こんなにもドキドキワクワクできるんだから――。

「乾いたらトップコートも塗ってね。そしたら完成だから！」

そう言った美央は、私よりも凝ったマニキュアの塗り方をしていて、二色使って、爪の先から根本までうまくグラデーションしている。

私ももつと練習したら、上手く塗れるかな……？

少しだけいびつな塗り具合の自分のマニキュアを見て、私はもつと上手になりたいと思った。

「でも美央ごめんね、マニキュアいっぱい使っちゃって」

服とは違ってマニキュアは消耗品だから、やっぱり申し訳ない。

でも美央はウインクすると笑顔で答えた。

「気にする必要ないよ！結構安いのばっかだし。これなんて百均だよ」

「え、百均にマニキュアなんてあるの!？」

「うん! 値段のわりになかなかいいのあるよ。百均他にもコスメ関係色々あるし、物揃えるには便利だよ!」

「そうなんだあ」

「ふふ、咲子って結構世間知らずだね。お嬢様みたい」

お嬢様…… って、そりゃ美央の方がそう見えるんだけどなあ。

柔らかい笑い方とか、キラキラした雰囲気とか、その容姿とか……。でも美央は全然そんなことには鼻にかけない。

…… というか、自分がそういう雰囲気を持つてることに気付いてないんだろなあ。

美央のそんな天然なところが、私は大好きだったりする。

「よし、じゃあ仕上げにトップコートいきますか!」

「なんだ、シールとかチップは付けないのか」

「だってちようどきらしてるんだもん。……… って」

私と美央が、同時に振り返る。

「おにいちゃん!」

「信也さん!」

二人の声は同時に発せられた。

いつの間にか私たちの背後に信也さんがいたのだ!

い、いつの間に……。

気配感じなかつたんですけど……!?

「よ、乙女たち! オシャレしてるねえ。どっか行くんかい?」

驚かすことに成功した信也さんは、まるでコマージュのようにニカツと白い歯を見せて笑う。

久々の信也さんに、私は少しだけ緊張してしまう。

「もーおにいちゃん、驚かさないでよう」

ブーと頬を膨らませて美央は怒ったフリをする。

「まあまあ。だって二人があまりにも真剣にネイルしてるから、ついちよっかい出したくなつてさ」

ケラケラ笑う信也さんは本当に年上だとは思えないくらい、やんち

やな感じがする。

「……よ、咲子ちゃん久しぶり。元気してた？」

「あ、は、はいっ。元気です！」

「ははは、その様子じゃそうみたいだな」

（信也さん、全然変わってないなあ）

一週間しか経ってないのだから変わってなくて当たり前なのだが、それが何故か嬉しかったりする。

「……で、おめかししてどっか行くのか？」

信也さんはさっきの質問をまた繰り返す。

「行かないよ」。これは咲子の練習！ファーストネイルだもん、ね

「咲子」

「うん」

首を傾げて同意を求める美央に私は答える。

ふゝん……と信也さんは穏やかな瞳でそんな私たちを見つめる。

「じゃあ、邪魔しちや悪いから俺は退散しますかね」

「あ！待っておいちゃん！」

振り返り出ていこうとした信也さんのシャツの裾を、美央がしっかりと捕まえた。

「あ？」

「頼みがあるの、咲子がバイトしたいって言ってるんだけど、おにいちやんのバイト先ってバイト募集してる？」

美央がそう言っただけで私は今日美央の家に来た目的を思い出した。

そうそう、そうだった！それがそもそもの目的よね！

……ネイルが楽しすぎて忘れてた。

「何、咲子ちゃんバイト探してるんだ！？」

「は、はい。……と言っても、ついさっきしたいなって思ったばかりなんですけど」

「はは、大方美央が話進めたんだろ。美央は猪だからな」

「何よそれっ」

「目的に向かって一直線ってこと」

さすが兄、美央の性格は把握してるのね。

信也さんはふくれっ面の美央から私に視線を移すと、ニコツと笑った。

切れ長の瞳も、そうすると柔らかい印象になる。

「俺んところなら、今人手不足だし大歓迎だよ」

「あ、あの、信也さんでどんな店で働いてるんですか？」

やっぱり美容師目指してるわけだし、そっち系かなあ？

……と思っっていたら。

「ケーキ屋さん。半分がカフェになってて、ウエイトレスの数足りないから女の子大歓迎だよ」

「ケ、ケーキ屋さん！？」

い、意外……。

もしかして信也さんで甘党？

「あれ、ケーキ嫌い？」

「い、いえ、大好きです！」

「なら話店長にしようか？俺も咲子ちゃんと一緒に働きたいしさ」

え……。

その一言に一瞬ドキツとするが、慌てて考え直す。

（信也さんは素直過ぎて誤解されやすい人だったんだ。

一緒に働きたいってのも、ほんと純粹にただ思っただけで……っ）

ああ、私って何て厚かましいんだろっ。

「やったじゃん咲子！バイトできそうだね」

「う、うん」

「また店長の返事聞いて、よかったら面接になるから咲子ちゃんの連絡先教えてくれるかな？」

「は、はいっ」

私は慌てて携帯電話をカバンから探る。

未だに番号覚えてないのだ。

「えっと、090の……」

読み上げると、信也さんは慣れた手つきで自分の携帯電話に入力していく。

そして、私の携帯電話が着信音を鳴らす。

「それが俺の番号ね」

「はい」

——うわ、信也さんと番号交換しちゃった……。

携帯電話をギュッと握り締めて、私は少しだけ胸を高鳴らせる。

「咲子、バンバンイタ電していいからね」

「なんだと、美央！」

信也さんは美央の頭を拳でグリグリする。

「きゃーいたーいつ」

「兄を愚弄したバツじゃ」

微笑ましい（？）兄妹ゲンカに私は思わず笑ってしまう。

ほんと、仲の良い兄妹！

クスクス私が笑っていると、信也さんはふと私の方を見何かに気付いた。

「お、咲子ちゃんはピンクかぁ。似合うね」

「え？」

それがマニキュアのこと言ってることは、すぐにわかった。

「見せてごらん」

信也さんはそう言って私の手を持ち爪を見る。

（——うわっ）

大きくごつい手が、私のちんちくりんな手を包む。

こ、これはちよつと……っ。

「はは、まだ塗り方ムラがあるな」

「ぶ、ぶきつちよで……」

「でもまあネイルは何度もやるうちに慣れるからな。咲子ちゃんもそのうちキレイに塗れるさ」

ネイルが上手い下手とかよりも、握られている手が熱くて、心臓の音がすごくて。

じわつと手からにじみ出る汗を信也さんに気付かれなくて、私はどうしていいのかわらなくなった。

(し、心臓の音が聞こえるっ)

……と、その時。

「おにいちゃんそれセクハラだよーっ」

美央がぐいっと私の腕を引っ張ったので、信也さんの手から逃れることができた。

よ、よかった……。あれ以上繋いでたら、心臓壊れるところだったっ。

「セクハラだとおー!？」

「そうよお、咲子が可愛いからって妹の親友に手エ出さないで」

美央が私を抱き締めながらべーっと舌を出す。

親友……という響きに、ちよっとくすぐったさを感じる。

「手はまだ出してないだろー?」

「まだって何、まだって!」

——ああ、また始まった。

二人の可愛い兄妹ゲンカを微笑ましく見守るこの図は、どうやら定番になりそうだ。

その日は結局、六時まで美央の家で過ごしあとにした。

見送るよ、という二人の誘いは悪いので断り一人で帰路についた。

マニキュアはもうキレイに落としてしまったけど、自分の部屋で何度も手を見ていた。

今度、自分のマニキュアを買おう。

色は——そうだな、信也さんが似合うと言ってくれたピンク色にしよう。

そう思った瞬間、手のひらが熱くなる。

信也さんの手のひら。

大きくて。

あつたかくて。

ごつごつと骨太い男の人の手。

携帯電話を枕元に置くと、私は布団をかぶった。

信也さんの番号が入った携帯電話。

今日は鳴るはずないけど、そのうち電話するって言っていた。
なのにどうして、こんなにも携帯電話が気になるんだろう。

——今日はなかなか、眠れなさそうだ。

夜の闇が深くなる中、私は明日を期待してゆっくりと眠りについた。

8 多分好き、絶対好き

「ね、お願い！このとおりだから！」

「もー、駄目って言ってるでしょ」

うー、お母さんの石頭！

バイトくらい許してくれてもいいのにー！

今日、信也さんから電話が来た。

信也さんのバイト先（ケーキカフェで名前は『エデン』）の店長が面接をしてくれるということで明日行くんだけど、肝心の親の了承が取れない状況にあった。

もー、バイトくらいOKしてくれてもいいのに！

「バイトなんて必要ないでしょ？」

「必要だよー！」

「何に必要なの？」

「そ、それは……」

オシャレのためです……と言ってもお母さんは納得しないだろうなあ。

どう言ったらうまくお母さんを説得できるか……と考えていたら。

「いいじゃん、バイトさせてあげれば」

生意気な声が背後から聞こえた。

弟の稔だ！

「咲子にとって社会勉強にもなるし小遣いもやらなくて済むし、反対しなくてもいいんじゃないかなあ？」

「うーん、でもねえ」

稔にしては珍しく、私をフォローしている。

これはチャンスかもしれない！お母さんは稔には弱いのだ。

私はすかさず稔の助け舟に乗った。

「そうだよ、お母さん！これからは必要なものは自分のバイト代で

買うようにするし」

「うーん……」

「暇な日だらだら過ごしてるよりは、よっぽど有意義になると思うの！」

「そうねえ……。そのバイト先のところはきちんとした店なの？」
夜遅くまでとかはないわよね？……とお母さんはまだ心配顔。

「その点は大丈夫！友達の紹介だし、ケーキカフェだから深夜まではやってないよ」

営業時間は聞いてないけど、まさか真夜中までやってはないでしょう。

すると、お母さんは少しだけ安心した表情になった。

よし！もう一押し！

「勉強もおろそかにはしないから！ね、お願いします！」

両手を合わせて頭を下げると、お母さんはやれやれ……と苦笑した。

「仕方ないわね、咲子がそんなに言うならやりなさい。ただし、成績が落ちるようならすぐにやめさせますからね」

「う、うん！ありがとう！」

やった、承諾成功！

あとは面接に受かるだけ……（これで落ちたらやだなあ）。

部屋に戻る階段の途中で、私は稔に声をかけた。

「稔、さっきはありがとね」

すると稔はニヤニヤしながらこう言った。

「いいって、好きな男とバイトしたい咲子のためならあれくらい」

「な！何それ！？」

カーツと顔が赤くなる私の頭に浮かんできたのは信也さんの顔。

え、え、好きな男——！？

「さっきケータイで楽しそうに話してたろ。でその後に母さんにバイトの話切り出すし。咲子、お前の行動はわかりやす過ぎだ」

生意気にフン、と笑う稔に私は口を金魚のようにパクパクさせるばかり。

「し、信也さんはそんなんじゃない……っ！」

「へえ、信也って言うんだ、咲子の好きなやつ」

あーっ！しまった、つい口が滑ってしまったあ！

よりによって一番厄介な相手につ。

案の定、稔は身を乗り出してさらに追求しようとする。

「どんなやつだ？ クラスメイト？ 格好いいか！？」

「もーっあんたには関係ないでしょお！」

これ以上ボクが出ないうちに私は自分の部屋に逃げ込んだ。

あゝ、ちよつとでも稔に感謝してしまったことが悔しい！

稔のバカ、す、好きな人がいるからバイトをするわけじゃないんですからね！

自分を磨くためにお金が必要なかっただけであって、そんな下心なんかないんだから！

——なのに。

それなのに。

（どうして、こんなにドキッてるの……？）

稔が『好きな男』って言った瞬間浮かんできたのが信也さんだったなんて……。

（もしかして私……信也さんのこと……？）

その先の答えをはじめ出す前に、頭をフルフル振った。

そんな厚かましい考えしちゃだめ！

私なんか相手にされるわけないのに……。

多分、信也さんから見たら私はすごいガキなんだ。

それに私なんてまだまだ冴えない女の子だし……。

あ……なんか暗くなってきた。

ダメダメ！ せつかくお母さんが了承してくれたんだから喜ばなくちゃ！

とりあえず、面接用に履歴書を書かなきゃね！

私は信也さんのことを無理矢理頭から追い出すと、履歴書を買いにかけた。

——今は、キレイになることだけを考えよう。恋は、その後だ。そう、決心した。

「じゃあ、今度の土曜の十時からということだ」

「は、はい！」

——意外にもあっさりと面接は終わり、さっそく働く日が決まってしまった。

私は今ケーキカフェ『エデン』の店内で面接を終えたところだった。『エデン』の内装はナチュラルなつくりで、木の丸いテーブルと椅子が並べられ所々に観葉植物やキレイな写真が飾られていた。落ち着いた雰囲気、昼下がりとかにのんびりするにはとてもいい感じだ。

店長の内山さんは二十代後半のとても素敵な落ち着いた男性だった。ただ少し驚いたのは、女性らしいしゃべり方や動作をすることぐらいで……。

「でも本当によかったわあ。バイトの子が全然足りなかったから、咲子ちゃん来て大助かりよ」

「いえ、こちらこそ」

野太い声の女言葉に違和感を感じつつ私は答える。

店長、見た目はすごい素敵なお兄さんなのに喋るとギャップがあるなあ……。

でも、男の人と話すのが苦手な私にとっては、店長の話し方は逆にとっつきやすかった。

「咲子ちゃんは、山田くんの紹介だったけど、どんな関係なの？」
信也さんの名前を出されて一瞬ドキッとする。

「えと、信也さんの妹と私が友達で、私バイト探してたら紹介して

あげるって言われて…」

「あら、あなた美央ちゃんのお友達なの？」

「美央のこと、知ってるんですか？」

「この店にちよくちよく来るわよお。とっても可愛いから、私たちの間でも有名だし」

ふえ〜……さすが美央。

でもよく考えたら、信也さんのバイト先だし美央の好きそうな店だしよく来るのも納得だ。

「てことは咲子ちゃんも清良高校？」

「はい」

「や〜ん、いいわねえ。あそこの制服すごく可愛いわよね〜。おっきいリボンがオシャレで！今度着て来て〜」

見た目はお兄さん。

でも女性のようにくねくねと身をよじらせて制服に憧れている様子がなぜか自然だ。

面白い店長だなあ〜。

怖い人だったらどうしようかと思ったけど、この人は好きになれそう。

と、その時店の扉が開いた。

鈴の音と共に入ってきたのは、信也さんだった。

「店長おはようございま〜す！あ、咲子ちゃん！」

信也さんの爽やかな笑顔に私は戸惑う。

い、いきなり登場だなんて、こ、心の準備が……っ！

「こ、ここんにちはっ」

思わず変にひきつる声。

やだ、私なんでこんなに意識してるの？

う〜これ絶対稔が変なこと言ったせいだあ。

「山田くんおはよ、咲子ちゃんの採用決まったわよ」

「やったじゃん咲子ちゃん！じゃあこれからはバイト仲間だな！よろしく」

「は、はいっ」

どう信也さんを見ていいのかわからず、私は目を泳がす他なかった。最近やっと挙動不振な行動がなくなってきたのに……とほほ。

「えと、それじゃあ私、そろそろ失礼します」

これ以上怪しい行動をしないうちに帰ろう。

そそくさと席を立つ私に、信也さんと店長は残念そうな声を出す。

「あらもう？」

「えっせつかく今会ったのに」

「す、すみません」

そんな風に言われると申し訳なくなる。

けど、これ以上不審にならないうちに、今は退散したい気分……。

「咲子ちゃん、バイト入るのいつ？」

信也さんが聞く。

「ど、土曜の十時からです」

「お！俺もその日入ってるよ。なら一緒に頑張ろうな」

そう言った信也さんの柔らかい笑顔。

瞬間、緊張がふと和らいだ。

自然に私も笑うことができた。

「はい！」

その様子を見て、店長が微笑んでいたことに私は気付かなかった。

私は信也さんに挨拶をすると、店長に見送られて店の外に出た。

「じゃあ咲子ちゃん、遅刻しないようにね」

「はい」

すると、店長はニマ〜と笑って小さな声でこう言った。

「山田くんとのこと、応援するからね」

「……へ！？」

突然の話題転換に私は驚く。

お、応援！？

「隠さなくてもいいわよ。山田くんのこと好きなんですよ！？」

「ち、ち違います！」

やだ、稔だけならまだしも店長までー！？

「ふふ、顔真つ赤にして可愛いわぁ」

「ほ、本当に違いますってば！信也さんはただの友達のお兄さんで……っ」

「あら、咲子ちゃんほんとに気付いてないの？自分の気持ち」

——え……？

気持ち……？

「まだ自覚がなかったのね、山田くんへの恋愛感情に」
恋愛……感情。

——ドクン、と胸が鳴る。

本当は、気付いていた。

でも、どうせ無理だから諦めようと押し殺していた。
でももう隠せない。

今はつきりと、自覚してしまったから。

私の本当の——気持ち。

（私……信也さんが好き……）

認めてしまった。

もう、戻れない。

でも認めてしまったら、案外心はすつきりした。

そうか……私好きなんだ、信也さんのことが。

無理に否定していた時よりも、認めたほうが心が楽になった。

私はか細い声で、店長に言った。

「あの……信也さんには言わないで下さい」

自分の気持ちは認めても、まだ伝える気なんてさらさらなかった。

「もちろんよ！私は恋する乙女の味方なんだから」

そう言っってウインクした店長がおかしくて、私はつい笑ってしまった。

本当に、店長がこの人でよかった……。

信也さんが好き。

ようやく気付いた……というよりも認めた、私の気持ち。でもよりによって、美央のお兄さんを好きになっちゃうなんて……。これじゃあ、美央には相談しにくいなあ。

帰路を歩く中、初夏の匂いを含んだ風が私の肌をなぜる。次に信也さんに会うのは土曜日。

その時は、拳動不振にならないよう気をつけなくっちゃ。

この時私はまだ思いもしていなかったのだ。

このバイトが、私と信也さんと美央の運命を、大きく変える一歩になることを。

……まだ、知らなかったのだ。

9 可愛いって言われたいー

「咲子可愛くなったねえ」

「こっぴつ！」

美央が突然変なことを言うもんだから、汚くも思わず飲んでいたドリンクを吹いてしまった。

昼休みのランチタイム。

机をひつつけて向き合っている美央が、私をまじまじと見つめてくる。

な、何？

「み、美央変なこと言わないで…っ」

「えーほんとのことなのにー！咲子ほんと、可愛くなったよ？」

そんな風に言われて嬉しくないわけがなかった。

「あ、ありがと…」

「ふふ、魔法がうまくいってよかった。でもこれだけ可愛くなったのは、咲子の努力の賜たまものだね」

「そ、そっかな」

「そうだよ！今日のヘアスタイルもすごく可愛いし！」

美央が誉めてくれた今のこのヘアスタイルは、実はバイト先で信也さんに教えてもらったものだ。

髪をまとめてひねってピンで留めるだけなんだけど、信也さんの手にかかるとすごく可愛くなった。

それを再現したくて今日の朝は頑張ったんだけど、その成果はあったみたい。

（信也さん……）

私の好きな人。

そして美央のお兄さん。

もし、美央が私のこの気持ち知ったら、どう思うかな……？

ちらりと美央を見る。

「ん、何？咲子」

「う、ううん！何でもないっ」

ううーん、やっぱしばらくは美央には言えないや。

美央に言ったら『じゃあおにいちゃんとの仲とりもってあげる！』

……て言われそうで怖い。

今はまだ信也さんのそばにいただけで幸せ。

だからしばらくこの気持ちは、自分だけにとどめておこう。

そんなことを私が考えているとは少しも知らない美央は、無邪気に笑ってこう言う。

「今度行っちゃおうかなーエデンに！咲子のバイト姿見てみたいー」

「え、なんか恥ずかしいなあー」

美央の相変わらず可愛い笑顔に、少しだけ後ろめたさを感じた。

ううん、友達のお兄さんを好きになるって、難しい……。

「咲子ちゃん、これ16番テーブルにお願い！」

「はい！」

土曜のケーキカフェ、エデンはとても忙しい。

特にランチから夕方にかけての時間帯はカップルや女性でとても賑やかになる。

まだ不慣れな私は、とにかくバタバタと慌ただしく店内を駆け回っていた。

ああ、接客業は大変だとは聞いてたけど、まさかここまでとは思わなかった。

店長は『そんなの慣れよ』とか言ってたけど、いつ慣れるのか……。

「咲子ちゃんごめん、これ2番テーブル」

「あ、はい！」

キッチン担当の信也さんが、カウンターから呼び掛けてくる。

「咲子ちゃん、頑張ってるね」

「は……はい！」

どんなに忙しくても、不慣れでも。

信也さんの笑顔があれば私は少しも辛くなかった。

（よし！頑張るぞっ！）

どうやら恋は女の子を強くさせるらしい。

私は土曜のピークを信也さんの笑顔を支えに、何とか乗り越えることができたのだった。

「はー、ようやく落ち着いたわねえ」

お客さんがまばらになった午後四時、店内には私と信也さんと店長、そして藤原さんが残っていた。

藤原さんは私より二つ上の高校三年生の男の子だ。

気さくな関西弁（小さい頃兵庫県から引っ越してきたらしい）を話す面白い人だ。

「あーやつば土曜はしんどいなあ、なあ？咲子ちゃん」

そう言って私の肩に手を置く。

「え、ええ」

藤原さんは気さくで話しやすい。

でも、このボーディータッチの多さは少しだけ苦手だった。

「な、咲子ちゃんちよつと休憩せーへん？疲れたやろ」

そう言っでぐいつと私を肩ごと寄せようとする。

（え！？やだ……！）

ちよつと強引過ぎやしないかと思う行為に私は困惑する。
肩に置かれた手が嫌……っ。

——と、その時。

「バカ原、お前はまだ厨房の片付け残ってたんだろ」

「い、ででで〜！」

信也さんがバカ原……じゃなくって藤原さんの耳をぐいつと引つ張ったおかげで、肩の嫌な温もりが消えた。

（た……助かった）

藤原さんには失礼だとは思いつつも、ほっとしてしまった。

「いつてーよ、山田さん！」

「さあさ、とつと片付け片付け！」

そのまま信也さんは藤原さんの耳を引つ張ったまま、厨房へと藤原さんを連行していく。

……もしかして。

……助けてくれたのかな？

しかし、すぐにその考えは打ち消す。

いやいや、そんな都合の良いように考えちゃだめだ！

ただ単に藤原さんが片付けまだしてなかったから、信也さんは連れて行っただけで……。

「ふふ、山田くんたらヤキモチかしら」

「え!？」

傍にいた店長が変な含み笑いをしてそんなことを言う。

ヤ、ヤキモチ!？」

「そ、そんなわけないですよ」

私は慌ててそれを否定する。

やだ、私の都合の良い考えよりももっと図々しい考えだよおつ。

信也さんがヤキモチなんて、焼くわけがないのに……！

「あら、私にはそう見えただけど？」

「もう店長、からかわないで下さいっ」

うう、店長って少し美央に似てる気がする。

そっいえば美央が『私店長とは大の仲良しなの〜』とか言ってたけど、確かに気が合いそう……。

「あら、からかってなんかないのに」
そう呟いた店長の台詞を、私はあえて聞こえないフリをした。
これ以上、欲張りになりたくない。
今はただ信也さんの傍にいれるだけでいいから……。
今はそれだけで、いいの。

午後六時。

エデンは午後八時までの開店だったけど、私のシフトはそこまでだった。先にかかることとなった。

私はバイト用の休憩室で帰り支度をしていた。

「よし、髪オツケー……と」

飲食店なのでエデンでは髪を結ばなければならない。

ピーク時にドタバタと走り回ってた私の髪は乱れに乱れ、それを直すのに少々時間をかけてしまっていた。

だって、髪型にはいつも気をつけていたい。

信也さんに少しでも良い印象を残したいから……。

そんなことを考えていたその時。

「あれ、咲子ちゃんまだ居んだ」

「し、信也さんっ」

休憩室に姿を現した信也さん。

うわぁ、これって何て言うんだっけ？噂をすれば……ってやつ!？
(ちよつと違うか……)

わたわたと慌てる私。

「す、すみませんっ」

「プツ……何で謝るの？咲子ちゃんてほんと面白いなァ」
クスクス笑う信也さんに私の顔はかぁーッと赤くなる。

ああもつ、何でうまく立ち振る舞えないんだろう？

とんちんかんな行動は信也さんの前ではなるべくしたくないのになあ……。

信也さんはどうやら休憩しに来たらしく、備え付けのパイプ椅子に座り、ふう……と息を吐いた。

厨房もなかなか忙しそうだったもんなあ。

「お、お疲れ様です」

「ん、咲子ちゃんもね。今日はホール忙しかったろ？」

「はい、もう目がぐるぐるでした」

「ははは、確かにそんな感じしてたなあ」

「あ、ひつどい」

思わず私も笑ってしまう。

ああ……やっぱ好きだな、信也さん。

なんていうか、空気が好き。

話してると穏やかになる。

最近を意識しっぱなしでドキドキしてばかりだったけど、落ち着いて喋れば不思議と穏やかな気持ちになる。

そんな空気が、私は好きだった。

「そっぴやさ……咲子ちゃん」

「はい？」

突然神妙な面持ちになる信也さん。

え……何だろう。

首を傾げ次の言葉を待つ私に、信也さんは言いづらそうに言った。

「その、藤原は大丈夫か？」

「え……？」

藤原さん……？

「変なこと言われたりされたりしてないかな？その、あいつ良いやつなんだけど、軽いところあつから……」

変なこと……って。

えええー！？

「な、ないですよ!」

ぶんぶんと手を横に振る私の脳裏に、ちらりと肩に手を置かれた時のことがかすめる。

で、でもあれは別にただのコミュニケーションみたいなものでしょ?

「ほんとに?」

眉間にシワを寄せる信也さんなんて初めて見た。

私はコクコクと首を縦に振る。

「ほ、ほんとです!あの、確かに藤原さん過剰なところありますけど、変なこととかは別に……っ」

「でも今日のアレは嫌だったんでしょ?」

「え……」

ドキツとなる。

アレというのが、肩に手を置かれた時のことだとはすぐにわかった。

「咲子ちゃん表情固くなるからすぐわかったよ」

ニツと笑う信也さん。

えー、私ってそんなに表情出やすいのかな!?

「嫌なら俺からもあいつに言っておくからさ」

「あ、いいです!大丈夫です!」

「え、でも」

「本当にいいんです、その……こんなことでバイト先の人と気まずくなるの嫌だし」

こんなことで信也さんに迷惑をかけたくない。

でも、私が嫌がってるって気づいてくれたのは、とても嬉しかった。

「でもその……助けてくれて、ありがとうございます」

あの時藤原さんを連れて行った行為が私のためだったとわかって、私はとても嬉しかった。

思わず笑顔になってしまった私を、信也さんが目を細めて見つめる。

「咲子ちゃん……可愛くなったな」

「へ!?!」

——デジャブ?とも思える発言。

しかしその発言は美央の時とは比べようもないほど私の胸を高鳴らせた。

え……今、何て……！？

「そんなに可愛いから藤原なんか狙われるんだ」

「し、信也さん何言って……」

信也さんは嘘をつけない人だっけ知っている。

だからますます混乱する。

本当に私のこと、可愛いって思ってくれてるの——？

「じよ、冗談はやめて下さい！」

「冗談なんかじゃなくまじで！咲子ちゃん可愛くなったよ」

や、やめて！

好きな人にそんなこと言われたら、変な期待しちゃうよ……っ。

タコのように赤くなつた私はとりあえず小さな声で

「ありがとうございます……」

と呟いた。

ああ、美央と同じ会話のやりとりのはずなのに、こんなにも恥ずかしくて嬉しいなんて。

何だか居ても立ってもいられなくなつた私は、とりあえず退散することにした。

「あ、あの、お疲れ様でした！先、失礼します！」

「え？ああ、お疲れ様」

ペコリ、と頭を下げた私をきょとんと見る信也さん。

罪深い人……！

私は高鳴る胸を抑え、バイト先を後にした。

——信也さん、変に思わなかったかな……？

可愛いって言われることが、こんなに嬉しいとは思わなかった。キレイの魔法をかけられる前には味わえなかった甘酸っぱい幸福感

……—。

私はその味を噛み締めながら、ゆっくりと帰路を歩いた。

これからその先に、とてつもないもっと大きな幸福感が待っているとも知らずに……。

9 可愛いって言われたいー（後書き）

続き追加が遅くなりました（<|>）こんな拙い小説ですが、め
たく読者数450人突破しました！読んでくださった皆さん、あり
がとうございます！「キレイの魔法」はまだ続きますー！キャラも
増え始め、そろそろ展開が変わってくるかも…！？続きもぜひ読ん
で下さいね！

10 ダイエットの前の静けさ

ダメ。

ダメダメダメーッ！

それ以上いつちゃダメエーッ！！

「あ、あゝ……」

しかしそんな祈りも虚しく、目盛りは予想以上にまわってしまった。
針が示す数字は、過去最高記録……。

「ふ、太つてる……」

やばい、とは思っていた。

バイト先エデンの残り物のケーキを頂いたり、味見をさせられたり
していたから、もしかしたら……と思っていたから。

「やばい……」

高校一年生、成長まつ盛りなこの時期にケーキを食べまくれば、こ
うなるのは当たり前だった。

私はバスタオル一枚でううと唸るしかなかった。

（そういえば最近肉付きがいいような……）

付いてほしいところには付かず、付いてほしくないところには付いてし
まうのが脂肪である。

「やばいよ……」

「確かにやばいなあ、これは。俺より重いんじゃない？」

「……」

その声は！

「きゃ……み、稔ーっ！！何入ってきてるのー！？」

バスタオル一枚の私は驚いて壁際に身を寄せた。
み、見られたー!?

いや、裸なんてこの際相手は稔だし別にいいんだけど（いや、あんま良くないけど……）、体重の数字を見られるなんて！
壁に張り付いた私に、稔はニヤリと笑いかける。

「……最近すこし可愛くなったからって、油断したんじゃない？
う……っ。」

デブやブタと罵られるよりも痛いところを突かれて、私は唇を噛んだ。

確かに私……ちょっと浮かれていたのかもしれない。

キレイの魔法をかけられて。

可愛いつて言われて。

私は少し、いい気になっていたのかもしれない。

……あ、なんか沈んできた。

と、そんな私を見かねたのか稔がニコツと笑ってこう言った。

「ま、咲子もまだまだこれからなんじゃん？これぐらいでへこたれるなよ」

「稔……」

思わずジーンとしてしまう。

そ、そうよね。これから頑張っていけばいいんだから！

が、しかしそこはやはり稔であった。きつちりと私をいじめることも忘れない。

「ただもう少しこころへんに肉を移動させられないかねー？」

「き……きゃあゝっ！触らないでよスケベー!!」

ああもう、やつぱり稔は稔だ！

私は稔に平手打ちをすると洗面所から出た。後ろから

「いつてえ」

という悲鳴が聞こえたが、そんなの知らないもんね！

ああ、でもほんとやばいなあ……。

何とかしなくちゃ！

私はお腹に手をあてると、はぁ……と溜め息をついた。
次なる課題は、ダイエット……か。とほほ。

「あり？ 咲子お弁当箱変えたの？」

「う、うん。ちょっとね」

いつも通りの美央とのランチタイム。

ただひとつ違うのは、私の前に置かれた小さめのお弁当箱だった。

単純だとは思うけど、やっぱりダイエットの第一歩はこれだと思うの。

「かわい〜ね、そのお弁当箱！ でもちょっとちっさくない？」

ぎくつ。……さ、さすが美央！

やっぱり恥ずかしいけど、美央には言つとこうかなア。

もしかしたら、ダイエットのいいヒントもらえるかもしれないし！

「じ、実はダイエットしようかと……」

しどろもどろに言う私に、美央はすぐに反応した。

「え、ダイエット！？ 咲子が！？」

「み、美央声おっきい！」

クラスメイトの視線が、美央の大声により集まってくる。

きゃ〜、恥ずかしいっ！ ダイエットのことなんて、皆に知られたくないのに！

「あ、ごめんっ」

美央は一言謝ると、声を通常トーンに落として私に言った。

「でも咲子にダイエットなんて、必要ないんじゃない？」

「それがあるんだよ〜っ。見えないお腹とかについてなかなか気付かないから、余計質悪いかも……」

「ふーん、そうなんだあ」

美央は本当に意外そうに私を見つめる。

確かに私はチビだから小さいイメージがあるんだろうけど、小さくても太る時は太るのだ。

ああ、美央みたいなきれいなスタイルになりたい！

「ね、美央、なんかいいダイエット法ないかな？」

「うーん……と言われても」

美央はううむ、と眉間にシワを寄せる。

——きっと美央なら何かヒントをくれるはず！

それは、魔法をかけられた時から私の心の中にある美央への信頼からくるものだった。

美央は私を可愛くしてくれる。キレイにしてくれる。

美央の言うことは私にとって必ずプラスになる。

だって美央は私のキレイの魔法使いだから……！

——が、しかし。

「ごめん、私ダイエットしたことないんだ。だから教えてあげられないや」

魔法使いにだって、できないことがあるのだとそこで初めて気付いたのだった。

ガ、ガーン……。

キレイの魔法を期待していた私は、予想もしてなかった返しにショックを受けた。

でもよくよく考えれば、当たり前か。

美央にダイエットなんて、必要ないもんなあ……。――

「そ、そっかあ……」

しゅんとなる私に、美央はすまなそうに謝る。

「ごめんね咲子、役に立てなくて」

「うっん、いいの。私が勝手に聞いたただだし」

「よし、こうなったら独自で頑張るしかないか！」

これもキレイになるための試練なんだから！それにいつまでも美央に頼ってばっかじゃだめよね。

「私、ダイエット頑張るね」

そう言っただけで私は笑った。美央に必要な謝罪をさせてしまったせめてものお返しに。

すると美央も笑ってくれたので、私は安心した。

「……なんか咲子、ほんとに可愛くなったね」

「またそんなこと言うー恥ずかしいよ」

「だって本当にそう思っただもん！……ねえ咲子」

「ん、なあに？」

ひと呼吸おいて、美央が言う。

「もしかして好きな人ができた……とか？」

「……え！」

不意の問いはあまりにも的を射ていて。

私はつい身をこわばらせてしまった。

——嘘をつけない、悲しい性分。

「な、な、なんで!？」

「ふーん……いるんだあ」

ぎくぎくぎくーっ！

み、美央何でわかつちゃうの!？鋭すぎー！

（ああきつとこの後『誰だれ!？』って質問攻めになるんだっつ。でもまさかあなたのお兄さんです、なんて言えないしー）

この後の展開が容易に予想できて私は頭を悩ませた。

——が、しかし。

「それよりもさ、ダイエットならやつぱ運動じゃない!？今度プー

ルにでも行こうよお」

「え、え？」

突然の話題展開に、私は面喰らった。

（あ、あれ……てつきり質問攻めされと思ったのに……）

美央の性格なら、今の場面はそういうことになってもおかしくない。
いや、なるはずなのだ。

なのに何故か、美央は話題をダイエットに戻してしまった。

——お、おかしいなあ……。

思わず首を傾げてしまったけど、まあ追求されても困るだけだし、
いつかあ……と考えてしまった。

——それが前ぶれだとも知らずに。

「咲子、プール行きたいね」

「う、うん。でも水着着るならなおさらダイエットしなくちゃ」

「よーし、頑張ろーっ！」

無邪気に笑う美央。

可愛い美央。

かけがえのない私の友達。

——この時、私は気付くべきだったんだ。

美央の中で動き出した、感情に……。

11 たかいたかい！

それは甘い誘惑……。

「咲子ちゃん、これ持って帰らない？余っちゃったの」

にこりと笑う店長に悪意などない。

悪いのは、今まで深く考えもせずただただ甘いケーキをむさぼっていた……この私。

——甘い香りのシヨコラケーキ。

このビターチョコとクリームチョコのしっとりさを味わえたらどれほど幸せだろう。

……けど！

けれど……！！

「い、いいです」

私にその幸せを味わう資格なんて、今はないのだった。

ああ悲しきかな。

ダイエツト生活スタートから、こんな風に余り物のケーキを勧められるなんて！

「あらどうして？チョコ嫌い？」

いつもなら喜んで持ち帰る私が今日は断るもんだから、店長はきよとんと私を見る。

うう、チョコは大大大好きです。

「き、嫌いじゃないんですけど、ちょっと事情が……」

「あら、なあに？」

う……店長聞かないで。

店長は男の人なのに細いから羨ましい。

ケーキカフェの店長なのに、なぜ……！？体質なのかなあ。

「えつとですねえ」

いくらお姉さんみたいでも、店長はやはり男の人。

ダイエットのことを言うのは恥ずかしかった。

——なのに。

「あ、もしかしてダイエット！？だめよあ、若い子がそんなことしちゃー！」

……さすがは店長。

見た目は男の人でも中身は立派な女性だ。

私の考えてることなんて、すっかりばれている。

「でも本当に、太ってるんです」……」

私は降参してしまった。まあ店長になら、ばれてもいいか……。

「そうなの？そんな風には見えないわあ」

「皆そう言うんですけど、確実に体重が増えてて……。甘いモノ食べすぎたみたいですよ」

思わずしゅんとなってしまふ。

エデンのケーキは本当に美味しくて、できればこんな風に断るなんてしたくなかった。

店長にもなんだか悪いし、いろんな意味で落ち込んでしまふ。

そんな私を見て、店長は少しだけ苦笑していた。

「そう、残念ねえ。ならこれは山田君にでもあげようかしら」

「え、何をくれるんすか？」

（——え！し、信也さん！？）

その声を聞き間違えるはずなんてなかった。

振り返ると、そこにはいつの間に厨房から出てきたのか、信也さんが立っていた。

い、今の話聞かれた！？

「あら山田くん、厨房の片付け終わったの？ご苦労様！」

につこりと信也さんに笑う店長の後に、私もお疲れ様ですと声をかけた。

けれど頭の中はダイエットのことがバレてやしないかと、ヒヤヒヤしていた。

「ねえ山田くん、余り物のケーキ持ち帰らない？」

店長がそう言うと、信也さんは私を見つめた。

「あれ？咲子ちゃんは持ち帰らないの？」

「わ、私はいいです」

好きな人にダイエットをしているなんてバレたくなかった。

ただでさえ私はチビで地味というハンデがあるのに、さらに太ってるなんてことがバレたらそれこそ相手にされない。信也さんには絶対にバレたくない……！

が、しかし。

「もー山田くんからも言っておいて。ダイエットなんて必要ないって」

私の味方であるはずの店長が、あっさりと私の秘密を暴露してしまった。――て……店長おゝ！！

ひ、ひどい！よりによって信也さんに言わなくてもいいのにー！真っ赤になった私はどうしていいのかわからず、あわわ……と慌てふためく他なかった。

「え！咲子ちゃんダイエットしてるの？」

信也さんにそう言われても、恥ずかしくて目が合わせられない。は、恥ずかしい……！

そう思うと俯いた顔を上げることができなかった。キレイに磨かれた床に映る自分とにらめっこをする。

少し可愛くなれたからって、怠慢になっていた自分を信也さんには見られたくなかった。

床に映る自分が恥ずかしくて……。

そんな自分が遠ざかって……。

遠ざかって……。

遠ざかって……。

……。

——と、遠ざかる!?

「よつと」

「きゃあ……っ!？」

一瞬の無重力感と力強い手の温もり。

信也さんは私の脇に手をかけ、そのまま軽々と私の体を持ち上げてしまった。

いわゆる『たかいたかい』だ。

私は驚きを隠しきれず、つい大声を出してしまう。

「し、信也さん!や、やめてください!っ!」

「やっぱ全然軽いじゃん、ダイエットの必要なんでないって」

わはは、と笑う信也さんは無邪気に私をたかいたかいする。

い、いやあゝ!

私の全体重が、信也さんの手にっ!

「お、降ろしてください……っ」

「ダイエットしないって言ったらね」

「え……?」

きよとんと信也さんを見つめた。

「まったく、どうして女の子は必要なのにダイエットなんてするのか。充分今のままでいいのに」

少しだけムスツとした口調の信也さん。

お、怒ってる……?」

「私も……ですか?」

「こんな風に軽々と持ち上げられてもまだわからない?」

信也さんはそう言うと、私を降ろして頭をポンポンとたたいた。

それは信也さんが私に対するいつもの癖。

表情はいつの間にか柔らかい微笑みになり、私の心臓がぎゅう……っとなった。

「咲子ちゃんは今ままで充分可愛いよ」

——信也さん……！
ずるい。

そんなこと言われたら、私はますます信也さんのことを好きになる
しかない。

でも、こんな風に深みにはまっていきそうな感触を嫌いじゃないと
思っている自分がいる。

……ううん、もしかしたら。

いつその深みにはまるところまではまりたいって、思ってる……！
——？

「あらあら、私お邪魔かしら？」

「！」

店長のひとことに、ハッと私は我に帰る。

わ、私今何を考えて——！？

「咲子ちゃんどうしたの？顔赤いよ？」

「え！あ……っ、いや、そのっ」

さっきまで自分が考えていたことを思い返し真っ赤になる私。

やだ、これじゃ私変な子じゃない！

店長はそんな私を見て微笑んでいたが、そんなことに気付く余裕な
んて私にはなかった。

「ま、とりあえずダイエットはもうしないね？」

「え、あ、はい」

何がなんだかわからぬままうなづいてしまふ。

「よし！えらいぞ咲子ちゃん！」

そう言つてまたぐりぐりと私の頭を撫でる信也さん。

ダイエットなんてもう私の頭の中からすっかり出ていつている。

信也さんのことだけが私の頭の中を占めている。きつと信也さんが
私の頭の中を見たら、ビックリするだろうなあ……。

その時、高い鈴の音と共に誰かが店内に入ってきた。

閉店間際の来客は、私の親友であり、信也さんの妹である——美央だった。

その突然の来訪の意味を、私はまだ知らなかったのだった。

12 置いてきばりミルフィーユ

「はい、どうぞ」

「店長ありがとう！閉店間際だったのに、ごめんね」

「あらいいのよ、他ならぬ美央ちゃんだもの」

すまなそうな笑顔を作る美央に、店長はにこりと笑う。

美央の今日の服装は、段フリルのキャミにジーンズジャケット。アンダーは黒のミニスカートですごく可愛い。

そんな美央に魅とれてしまっている私は、向かいの席で座っていた。バイトからちようどあがったので、来店した美央とケーキを食べることにしたのだ。

「ん〜このミルフィーユ最高！」

ケーキを幸せそうに食べる美央を見て、何だか私まで幸せな気分になってくる。

私は自分のチョコケーキを口に運ぶと、ビターとスイーツのコラボレーションに舌を喜ばせた。

（おいし〜！）

やっぱりダイエットやめてよかった〜！

こんな美味しいもの、食べなきゃ損損！

「こっちのチョコも美味しいよ〜」

「本当に？一口ちょうだい！私のもあげるから」

楽しそうに食べる私と美央を、店長が微笑ましそうに見ていた。信也さんは厨房の奥で、明日の仕込みをやっている。

「あゝあ、でも咲子のウエイトレス姿見たかったなあ〜」

「来るのが少し遅かったね、事前に言ってくればよかったのに」
そう言いつつも、あのタイミングで来てくれてよかった……とつく

づく思ってしまう。あと一分早かったら、信也さんにたかいたかい
されてるところを見られるところだった。

「だって咲子を驚かしたかったんだもん」

そんなことを私が考えている事を知らない美央は、可愛く唇を尖ら
せる。んゝ、可愛過ぎるよ美央。

でもこんな風に美央と二人で過ごす時間が私は大好き。

最初は憧れの対象で、同じクラスだったけど話し掛けることのでき
なかったあの美央とこうしてケーキが食べられるなんて、あの時の
私は思いもしていなかったろう。

美央に出会って。

キレイの魔法を教えてもらって。

信也さんに出会って……—。

ねえ美央。

もし私が信也さんのこと好きって言ったら、どうする……？

「ねえ、咲子」

不意に美央が私を呼んだ。

「え、な、何？」

今考えていたことが見透かれたような気がして、私はドキッとした。

——やだなあ、私ったら過敏すぎ。

しかし次の瞬間、さらに私の鼓動が高鳴った。

「咲子の好きな人ってさ……」

（えっ……！）

大きく心臓が鳴り響いた。

美央はミルフィーユを食べる手を止め、テーブルを見つめている。
いつもはハキハキと言う美央が口をもごもごさせているのを見て、
私までつい変な緊張をしてしまう。

美央……？

「好きな人って、誰？私には言えない？」

「……………」

——美央………！

もしかして、何か気付いてる？

だからこんならしくない態度を………？

目の端に店長の姿が見えた。

私たちしかいない店内でのこの会話は、もちろん店長にも聞こえていて。

店長は、私がまだ美央に信也さんのことを言っていないことに、少し驚いているみたいな表情をしていた。

……… やっぱり隠すなんて美央に失礼だったのかな。

美央に言ったら信也さんに伝えられてしまうなんて変な心配して、私はちよつとやな子かもしれない。

それこそ美央を信頼してない証しだ。

美央をそんな子だと思ってるの？

（美央はそんな子じゃないよ………）

美央は優しい。

明るくて、素直で。

いつも笑っている太陽みたいな子。

——そう思ったら。

なんだか胸がすつとした。

そうだよ、恥ずかしいことじゃない………。

「あのね、美央」

カチャツとフォークを置くと、私は美央を見つめた。

「私の好きな人はね……… 信也さん」

思っていたよりも穏やかに、すんなりと言えたことに驚いた。言ったら心の中がふんわりと温かくなった。

美央。

私はあなたの、お兄さんが好きです。

信也さんが——好きです。

「……………んで？」

え……………？

「何……………で？」

俯く美央の表情は見えない。

でもその雰囲気は、いつもの明るい美央のものではなく……………。

「何でおにいちちゃんなの……………っ!？」
「!!!」

突然前を向いた美央は、悲痛な表情をしていた。まるで、世界の終わりをみたいに。

——美央……………!？

「私、認めないからっ……………」

そう言った美央の何とも言えない表情は初めて見るものだった。

美央はテーブルに手をつく、ガタン!と椅子を弾くように立ち上がった。

「咲子がおにいちちゃん好きだなんて、認めないから!!」

「美央っ!？」

そのまま店の外に飛び出していく美央。
突然のことに困惑する私は立ち上がりかけたまま動けない。
伸びた右手が所在なさに虚空を掴む。静かになった店内に、私と
店長だけが残された。

何で……？

美央、何で……？

静まり返ったエデンの店内。

残された私と食べかけのミルフィーユ。
ぽつんと立ち尽くして動けない。

美央が言った台詞が、何度も頭の中を駆け巡る。

『認めないから!!』

美央を追い掛けて行きたい。
でもまた抵抗されたら……？
そう思うと足が動かなかった。

店長と。

放りっぱなしのチョコケーキと。
残されたミルフィーユが。
動けない私を見ていた。

12 置いてきばりミルフィーユ (後書き)

メッセージや評価、どうもありがとうございます！これらは桜にとってかけがえないパワーの源です（＾・＾）これからも頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！！

13 雨と傘と涙と

窓の外をふと見れば、目では見にくい細い雨が降っていた。緑の葉が、濡れて艶を増している。

もう梅雨も終わりかと思っていたのに……。

（よかった、折り畳み傘持ってきて……）

降水確率三十パーセント。朝のニュースを見てすぐに折り畳み傘をカバンに忍ばせたのは正解だった。

廊下を一人歩きながらそんな風に考えていたら、背後から聞き慣れたダミ声が聞こえた。

「悪い、神崎！この資料を数学準備室まで運ぶの手伝ってくれないか？」

振り返ると、担任のミネさんが重たそうに資料を数冊を抱えていた。ミネさん——もとい峰山先生から半分くらいの資料を受け取ると、私は一緒に歩き出した。

「いやあゝ悪いな、神崎」

「いえ、これくらいいいですよ」

「ん、そうか？神崎はイイ子だなあ」

はっはっは、とダミ声で笑うミネさん。

私はそんなミネさんが好きだった。どちらかというと頼りなさげで背も低いし、女子生徒の憧れの的ではないけれど、かもしだす雰囲気は柔らかく親しみやすい。

だからミネさんは人気のある先生で、そんなミネさんが担任でよかったと思っている。

照れ臭くて本人には言えないけど、ね。

「そついいば神崎」

「はい？」

のんびりとした口調でミネさんが問う。

「最近山田と一緒にじゃないな、どうした？」

その言葉に、私の顔がひきつった。

——ミネさんは、本当によく生徒のことを見ている……。

「……ちよつと、ケンカしちゃって」

あれをケンカと呼ぶのかはわからないけれど、現状ではそう言った方が適切だろう。

あのエデンでの出来事以来、美央は私を避けているんだから……。ツキン、と胸が痛んだ。

「そうか、いつも仲イイお前たちにしては珍しいな」

ミネさんは苦笑している。

私はなんて言ったらいいのかわからず、曖昧に笑うしかなかった。雨の秘やかな音が微かに響く静かな廊下。

ミネさんはそれ以上私に何も聞かなかった。

そんな心遣いが、ちよつとだけ心に染みた……。――。

『認めないから……!』

そう言った美央。

正直、私はあんな風に否定されるなんて全然考えていなかった。

美央ならきつと、笑ってくれる……。どこかでそう思い込んでいた。

——でも、違った。

美央は、私が信也さんに好意を持つことに反対した。

でも……。その理由がわからない。

やっぱり私なんかじゃ信也さんに似合わないから？

理由を探そうとすると、そんなことぐらいしか思いつかない。

……でも、本当にそんな理由？

美央はそんな風に私を見ていた？

うぬづれかもしれないけど、私は自分と同じくらい、美央に親友と
思われていると感じていたのに……――。

ねえ、美央。

美央が、わからないよ……！

外は雨。そして私の心の中にも、悲しい雨が降っていた……。

「あれえ、美央傘ないのー？」

放課後の帰り支度の合間に、クラスメイトのそんな声が聞こえた。

廊下側に座る美央をふと見ると、クラスメイトの子に話しかけられていた。

正反対の窓側に位置する私は、遠巻きにそんな美央を見ていた。

「うん、天気予報見忘れちゃって」

「そうなんだ〜まだ雨止んでないよね？傘入れてってあげようか？」

「あ、いいよ！置き傘があるから大丈夫だよ」

「そうなんだ、なら安心だね」

楽しそうにクラスメイトと喋る美央。

今日は私と一回も話してないのに……それどころか、目も合っていないのに。

ツキン、と胸が痛む。

……やだな、こんなの嫌だよ……。

けれどふと次に美央の方を見ると、もうそこに美央の姿はなかった。
あれ……もう帰ったのかな。素早い美央の行動に、なぜか置いてき
ぼりをくらったような気分になる。

一体どのくらい、美央と帰ってない日が続いているんだろう。
重たいため息を口から吐き出すと、私はガタン、と椅子を鳴らし立ち上がった。

雨はまだ降っていた。しかも、さっきよりも強い降りだ。
傘なしでこの中を行けば、雨が痛いに違いない。

人気のない下駄箱で靴をはきかえると、私は出入口の近くに立って折れたたみ傘を取り出した。

水玉模様のお気に入り。

開けようとするその時に、ふと目の端に何かが映った。

——見間違えるはずなんて、ない。

困った表情で空を見上げていたのは、まぎれもなく美央だった。

美央は、私の存在に気付いていない。

「美央……？」

思わず呟いた私の声は、雨の音に掻き消されて美央に届くことはなかった。

……どうして？

確か、置き傘してあるって言ったのに……。

なぜ、美央が雨を前に途方に暮れているのかわからなかった。

置き傘があるなら帰れるはずなのに。

でもあашてるといふことは、ないってこと？

どうしよう……今は美央に避けられているけど、こんなの見逃せないよ！

「……美央！」

いつの間にか私は美央を呼んでいた。

美央ははじいたように私を見ると、その大きな目を見開いた。
驚愕——といった表現がぴったりだった。

「咲子……っ」

困ったような、気まずいような顔をする美央。

——そんな顔、しないで……。

「傘……ないの？」

「……」

「よかったら、一緒に帰らない？ 私傘あるし」

「……」

私が笑っても、美央は表情を強張らせるばかりだ。
途端に、胸の奥がうずきだした。

……美央。

どうして、そんな顔をするの？

……何も言ってくれないの？

悲しい。

避けられるなんて嫌だよ……！！

——そんな私の悲しみは、どうやら胸の中に収まりきらなかったらしい。

視界がぼやけた瞬間、頬に熱い筋が通った。

それはポロポロと瞳から落ち、とめどなく溢れた。

「美央……なんで……！？」

「咲子っ……！」

「わたし……し、何かしたかなあ……？」

美央が驚き、戸惑っていたのはわかった。

でも、私にはどうやってこの涙を止めればいいのかわからない。

悲しみが一気に溢れ、止まらないのだ。

「私が信也さん……好き、だから……？ こんな……私が……好きなのは、許せない……？」

途切れ途切れにしか声が出ない。

ひつくひつく、としゃくりを上げる私はまるで子どもみたいだ。

「咲子……」

美央は私を見つめている。

呆れているのか、困っているのか、涙でぼやけた私にはわからない。

——しばらく下駄箱に、私のすすり声だけが響いた。

そして、美央がぼつりと呟く。

「……咲子……ごめん。ごめんね……」

そう言った美央の声は震えていた気がする。

美央はきびすを返すと、次の瞬間外に出て、どしゃぶりの雨の中に飛び込んでいった。

「美央!!」

バシャバシャと水しぶきをあげて、美央は遠ざかっていく。

……美央!

そんなに、私と一緒に嫌なの……?

でも、あの悲しそうな声は……。

美央の背中がどんどん遠ざかっていく。

雨が、美央を隠してしまう。

「……美央」

わからないことだらけだ。

でもそんな中でわかるただひとつの真実は、私は美央とまた一緒にいたい——。

それだけなのかもしれない。

どしゃぶりの雨の中。

私は涙を拭って、一人傘をさして歩いた。

うつつつけの空模様の中を……歩いた。

13 雨と傘と涙と (後書き)

だいぶ遅い更新になってすみませんでしたm(_____)m 汗!メッセー
ジも何通かいただき、こんな私の小説を楽しみにしている方がい
ることがわかりとても嬉しかったです!! まだまだ文章力の足りない
春野桜ですが、精一杯描くので応援よろしくお願いします(^-
^)

14 Sweet Dream・Bitter Real

「お待たせいたしました、ストロベリータルトです」

「え、違いますけど……」

「!……し、失礼しました!」

慌てて私はストロベリータルトをトレイに戻した。

お客さんであるキレイなお姉さんが、きょとんと私を見ているのがわかって、私は恥ずかしくなった。

ああ、これで今日何度目の失敗だろう……。

自然と重い溜め息が、口から吐かれた。

今日は金曜日。

明日は学校が休みだから、バイトのシフトはラストまでになっている。

今までなら、信也さんと長く働いていられる!……て喜んでいただけ、今は素直に喜べない。

美央と喧嘩したあの日以来、私は信也さんとともに話せないでいた。

なぜなら……。

『なんでおにいちゃんなの……?』

『私、許さないから!』

——信也さんと親しくすることは、美央に対しての裏切りになるような気がして……。私は、信也さんを避けていた。

それに信也さんが気付いているのかは、私にはわからないけど……。

最後の客が帰ると、私は店内をホウキで掃き始めた。
今は厨房に信也さんが、ホールに私と店長がいる。

店長はテーブルチェックをしながら、私に話しかけてきた。

「咲子ちゃん、今日は疲れちゃったかしら？大丈夫？」

その声は本当に心配そうで。

失敗続きだった私は、とても申し訳なく感じてしまった。

「今日は……すみませんでした！失敗ばかりで迷惑かけて……っ」

メニューを違うテーブルに運ぶわ、水をこぼすわ、壁にぶつかるわ……。

本当にひどい。

けれど店長はそんな私に、優しい言葉をかけてくれる。

「いいのよ、別に！それよりも……」

店長が厨房を気にしながら、声をひそめた。

「美央ちゃんとは……どう？仲直りできた？」

「……………」

あの時居合わせていた店長だけが、私と美央のことを知っている。

私はふるふると頭を振った。

「そう……、早く仲直りできるといいわね」

優しい店長の声が、じんわりと心に染みる。

実は知っていたんだ。

私が信也さんを避けていることに店長が気付いて、なるべく私と信也さんを二人きりにならないように気を配ってくれていたこと。

店長は、本当にいい人だ……。

——と、その時。

「店長、厨房片付け終わりました！」

信也さんが厨房から顔を出し、声をかけてきた。

「はい、ご苦勞様！上がっていいわよ」

店長が明るい声で信也さんに返す。

が、しかし。

「あ、その前に咲子ちゃんちょっと来てくれる？」

「えっ」

なぜか信也さんが私を厨房に呼ぶ。

挨拶と仕事の内容以外は話していなかったから、ドキンと胸が跳ねた。

ど、どうしよう……？

ちらりと店長を見ると

「いつてらっしゃい」

と優しい目をしていた。

これ以上避けるのは限界だと、店長は気付いていたんだ。

私は、きゅつと唇を結ぶと足を厨房へ進めた。

中に入ると信也さんが笑いかけてくれた。

「咲子ちゃん、こつちおいで」

そう言つて信也さんは私を厨房の奥へと連れていく。

奥まで行くともう店長の姿は見えないから、まるでふたりっきりになったような錯覚に陥る。

……ううん、錯覚なんかじゃない。

確かにこの厨房には、私と信也さんしかいないんだから……――。

（な、何の用だろ……避けてるのやっぱ、バレちゃった？）

悲しいかな、私は嘘がつけない性分。

けれど信也さんはニコニコして、厨房の一番奥にある作業台の前に立った。

私に正面を向けて、後ろに何か隠してる……？

「ふっふっふっ……咲子ちゃん、見て驚くなよ」

含み笑いをする信也さん。年上なのに、少年みたい。

「??」

訳もわからずきょんとする私に、信也さんが派手なアクションをつけて後ろにあるものを見せた。

「はい、じゃーん！」
「あ！」

それは、ケーキだった。

とても小さなチョコレートケーキ。

真ん中に《SAKO》でホワイトチョコペンで描いてある。
その横にはなぜか犬の菓子人形がちょこんと置いてある。

これ、信也さんが作ったの……？

私の名前が描かれた、チョコレートケーキ。

驚く私に、してやっつたりの信也さんの顔が覗きこんだ。

「驚いた？」

「お、驚きますよ！だってこれ……え？え？」

慌てふためく私を見て、信也さんが柔らかい笑顔になる。

「俺から咲子ちゃんへのプレゼント。最近元気なかつたろ？だから、さ」

「あ……」

そうか。

私が避けていたのを、信也さんはそう受け止めていたんだ。
元気がない、て。

だから励ましてあげようと、こんなプレゼントを……？
どうしよう……すごく嬉しいよ……！！

胸が優しい痛みで満たされる。

私やっぱり、信也さんが好き――。

「ありがとうございます」

自然と笑顔とお礼の言葉が溢れた。

好きな人にこんなことされて、嬉しくないはずがない。

「喜んでくれた？」

「もちろんです」

ニコリと笑った私に、また信也さんもニコリと笑う。

美央ごめん、私やっぱり信也さんが好き……。

片思いなら、許してくれる……？

「咲子ちゃんチョコ好きだったろ。名付けて『SAKO, Sスペシャルわんこケーキ』！どう？」

「あは、何でわんこなんですか？」

「だって咲子ちゃん犬っぽいもん」

「えー、そうですか？」

久しぶりに話した信也さんとの会話は、やっぱり楽しい。

私の中で何かが満たされていく感じがあった。

ぽかぽかと、温かい何かが。

「私犬に似てますか？」

「うんうんそっくり！くりくりしてる目とか、頭なでたくなるとことか」

冗談ぽく笑う信也さん。

しかし次の瞬間、少しだけ真面目な顔をした。

「あと……ほおっておけないことか」

——え……。

ピリ、と何か空気が変わった。

信也さんは私を見つめている。

ただその瞳が、いつもの優しい目じゃなくて。

何か、熱いものを秘めているような……そんな目。

「信也……さん？」

——違う。

いつもの信也さんじゃ……ない？

「咲子ちゃん」

信也さんはさらに強く瞳を向けた。

そして、信じられない台詞を発した。

「好きだ」

——え……？

「……じゃなくて、好きです」

照れ臭そうに言い直す信也さん。

けれど茫然とする私には、まだ今の状況が理解できていなかった。

え……ちょっと待って。

今、何て言ったの……？

好きだ。

好きです。

——信也さんが私に、そう言ったの……？

ドクン……と、一気に鼓動が激しく鳴り出そうとした——次の瞬間。

『認めないから……！』

美央の悲痛そうな声が聞こえた。

（あ……っ！）

気付けば私は、後ずさってガタン、と作業台にぶつかっていた。

駄目……！

私……私は……！

「……ご……ごめんなさいっ！」

気付いた時にはもう、手遅れの台詞を発していた。

でも今の私には、これしかない。

信也さんの顔が見れなくて、すぐに背を向け走りだし厨房を出た。

途中店長の声が聞こえたけど、すぐに休憩室に飛び込んでしまった。

——まさか、信じられなかった。

あの信也さんが私のことを好きだなんて。

涙が出るくらい嬉しい……！

夢みたい……っ！

——でも。

私にとって美央の存在は、信也さんと同じくらい……もしかしたらそれ以上なのだろう。

一瞬よぎった美央の悲痛な叫びが、私を止めた。

美央にあんな表情をさせたまま、信也さんに好きだなんて言えない

……っ。

大好きな人からの告白。

夢にさえ見ていなかった夢だった。

でもそれは、決して飛び込んでほらない居場所。

飛び込んだらきつと、私は後悔する……。

「これで……いいんだよね」

小さく呟いた言葉は誰にも届かず休憩室に消えていった。

これでいいんだ。

そう考えても何かが胸を締め付けて、私は込み上げてくる嗚咽を吐き出した。

とめどなく流れる涙が止められない。

これでいいんだ、これで……。

遠くでぼんやり、そう思った。

15 〱 クライな自分、スキな自分〱

鏡をふと見る。

そこには、いまだに慣れないメイクをやっと終わらせた自分が映っていた。

まだまだ上手とは言えないメイクの腕前だけど、数力月前と比べればなかなかの上達ぶりだ。

そう、数力月前と比べれば……—。

（数力月前には考えられなかった展開だよね……）

まさかこの私が、信也さんに告白されるなんて。

……でも、夢じゃない。

私は確かに昨日、告白されたんだ。

厨房の中で……信也さんが作ってくれたケーキの前で。

『……好きです』

照れ臭そうに。

けれど真剣にそう言ってくれた信也さん。

あの言葉が嘘だなんて、私は思っていない。

信也さんは思ったことを素直に口にする人……。

それが原因でフラれてばかりいるらしいけれど、私にはそれが魅力的だった。

（信也さん……）

時計をちらりと見る。

もうすぐバイトの時間。昨日の今日で信也さんに会わなきゃならな

いこの状況は、ちょっときつい……。
バイト、行きたくないなあ……。

——そんなことを考えていたら。

「ブサイクになってるぞ、咲子」

「……！」

突然、鏡と私の間に稔の顔が現れた。

い、いつ部屋に入ったのさー！？

「み、稔！」

「何鏡の前でぼーっとしてんだ？もうすぐバイトの時間だろ」

……なぜ姉のスケジュールを把握しているのだろうか？

私は稔相手に口ごもるしかなかった。

「なんだ咲子、バイト行きたくないのか？」

ギクッ。

するどいやつ。

「別にそんなじゃないけど……」

「あ！もしかして例の信也って男となんかあったのか！？」

（……っ……！）

な、なんでわかるのー！？

お……恐るべし、稔！やだなあ、この後絶対稔私のことからかうん

だよー！

何があつたんだ、とか。

咲子にも悩みなんてあるんだな、とか。

……けれど。

予想に反して稔は少しだけ真剣な表情になった。

「らしくないなあ、咲子」

……え？

きよとん、とする私の前で腕組みしている稔が、何かを諭すような表情をしていた。

「何があつたかは知らないけど、また昔の咲子に戻ってるぞ」

「……！」

——ビク、と震えた。

私の……臆病な心が。

「せっかく可愛くなっていきいきしてきて、俺咲子のこと見直して
たんだぜ。なのにまた暗い顔してて……今までの努力台なしにするのか？」

今までの……努力。

そういえば、私はどうしてキレイになりたかったんだっけ？
どうして、あんなに努力をしたの？

……ああ。

ああ、そうだ。

——私は私が嫌いだった。

こんな暗くて可愛くない自分が大嫌いだった。
だから変わりたいくて。

自分を、好きになりたい——ただそれだけを思って。
そして私は変わったの。

二人の魔法使い——美央と信也さんに出会って。

自信をこの胸に刻むことができたの。

でも、今は？

こんな自分……好きになれるの？

私……私は……。

何かが、吹っ切れた。

「……ありがとう、稔！」

こんな私は嫌。

私は……前を向いていたから。

「ん」

すっかり稔の顔を見つめたら、稔は小さく笑ってそう言った。
何だかわからないけど、心のもやがふつと消えた気がした。

「ま、それより時間気にしたら？」

「え、あ！もうこんな時間！？」

ふと時計を見るとバイトの時間まで残り二十分くらいだった。

きゃー！まだ用意しなきゃいけないのに！マッハで自転車走らせなきゃ！

私はわたた、と慌てながら準備を始めた。

稔はそんな私を見つめて肩をすくめてやれやれ、と笑い部屋を出ていく。

パタリ、と扉が閉じる頃には、そこには暗い顔をした私はいなかった。

稔……ありがとう。

16 〱ピンチは突然に〱

「え、買い出し……ですか？」

「せやで」

稔の叱咤を受けて出向いたバイト先。

いざ、信也さんとの顔合わせだ！……と意気込んで来たのに、信也さんは店長の指示で買い出しに出掛けているという。

そう教えてくれた藤原さんを前に、私はなんだか肩透かしをくらわされてしまって動揺してしまった。

なんだあ……いないのか。

「ん、どしたん？ 咲子ちゃん」

「あ、いえ、何でもないです！」

失礼します、と私は頭を少しだけ下げるとそそくさと藤原さんから離れた。

実はあの手を肩に置かれて以来、藤原さん苦手なんだよね……申し訳ないんだけども。

（もしかして店長また気をまわしてくれたのかなあ）

それは充分に有り得ることだった。

店長は何かと気配り上手だし、人間関係に敏感な人だ。

告白されたあの日。

いきなり店を飛び出したのだから、店長が私と信也さんの異変に気付かないわけがないんだ。きっと私と信也さんが気まずくならないよう、離してくれたんだ。

（でもここで逃げるわけにはいかないよ……！）

忘れかけていた、頑張る気持ち。

逃げているなんて嫌。

だから、信也さんに言おう。

——私も……信也さんが好きです……て。

でも、美央が許してくれるまで待ってて下さい、て。

——それが、私の出した答えなの。

信也さんも美央も大好き。

だからこそ、美央に反対されたまま付き合うことはできない。
だから、待っていてくれますか？……と。

回りくどいかもしれないけど、それが私の望むカタチだった。

（とにかく、店長の誤解は解かなくちゃ！）

信也さんがいない時は、厨房をまわすのは店長だった。

私は店長のもとへ行こうと厨房へ足を向けた……が。

チリーン、とドアの開く音がした。

「いらつしゃいませ！……ほら咲子ちゃん、仕事やで」

「あ、はい！」

タイミング悪く続々とお客が入ってきた。

（仕方がない、また後にしよう）

落ち着いた時にまた声をかけようと考え、私はまだ慣れない営業スマイルでバイトに勤しんだのだった。

時刻は三時半。

四時にあがる予定の私は、まだ店長に話をできないでいた。

（こういつ日に限って忙しいんだから）

できれば落ち着いた状態で話をしたいし、また後日改めてしようかなあ。あ、でもちよつと客も少なくなってきたし、帰りがてらに声かけてもいいかなあ？

そんなことを考えていたら。

「咲子ちゃん」

藤原さんに声をかけられた。

なんか今日はよく藤原さんと話すなあ。

「はい」

「ちよつと裏の倉庫から予備のおしぼり出してきてくれへんか、足りんねん」

「あ、わかりました」

エデンの店の倉庫は厨房と反対の位置にある。

倉庫というよりも物置部屋といったそこに、私は足を向けた。

お客さんから見えないよう配慮された倉庫は、一步入ると賑やかな店とは違う雰囲気になる。

「えーと、おしぼりおしぼり……」

あれ、いつもは手前にあるのに今日は奥にある。

おかしいな…… と思いつつも私は倉庫の一番奥へと歩いた。

その時。

——パタン。

静かに閉められた扉の音と、カチャリとかけられた鍵の音。

（え……！？）

振り返るとそこには、なぜか藤原さんがいた。

「藤原さん？」

なんでおしぼりを取りに行かせたのに、わざわざ来るの？
ううん、それよりも……あの鍵の音は……。

「ようやく二人きりになれたなあ」

私に近づいてくる藤原さん。

そこにはいつもの愉快的関西のお兄さんの顔は……ない。

「あ……あの」

急に鼓動が早くなる。

警報みたいなのが私の中で徐々に強くなる。

何……？

怖い……っ！

動けないでいる私の目の前に、にやりと笑った藤原さんが立った。
気付けば私の後ろには冷たい壁。

その壁に、藤原さんが片手について私に近づいた。

何……これっ。

強張って動けない私を見て、藤原さんの目が細くなる。

「咲子ちゃん、ほんと可愛くなったよなあ」

そう言って藤原さんの手が私の顎にかかる。

（いや！）

そう思っても声が出ない。

体が強張る。

藤原さんはにやにや笑いながら言葉を続ける。

「実は入ってきた時から目えつけててん。最初は芋臭い感じやったけど、ええ感じになったなあ。好みやわ」

言っている言葉は告白のよう。

けれどその声が、表情が。まるでモノを見ているかのように感情がなく、怖い。

信也さんのしてくれた告白とは全然違う――。

「いや……！」

逃げようと無理矢理体を動かした——のに。

「おっと」

藤原さんの反射神経は早く、両手を壁につかれて私はその中に閉じ込まれてしまった。

「ひどいなあ、咲子ちゃん。人が告白しとんのに」

告白？ そうなの？

それならこんな風に警戒しているのは、確かに悪いけれど……。

「咲子ちゃん俺と付き合わへん？」

どうして、藤原さんはにやにやしているんだろう……。

「ご……ごめんなさい、私、好きな人いるんですっ」

勇気を出して私は断りの言葉を口にした。

私が好きなのは信也さんだけ、他の人は今、考えられない！

「それ、山田さんのことやる」

「えっ」

ば、ばれてるっ。

「せやけどな、それは不平等あらへんか？ 俺にも一回くらいはええやろ？」

不平等？

一回？

藤原さんの言っている意味がわからない。

不平等と言われても、大抵の人は好きな人は一人だけでしょう？
それって、どういう……。

「まあぶっちゃけ付き合わへんでもいいから、一回くらいやらしてな」

——その時。

最悪のシナリオが頭を過ぎった。

密室状態の倉庫の中。
藤原さんから逃れる術は——なかった。

17 欲しかった温もり

自慢じゃないけれど。

私は生まれてこのかた、十六年間告白なんてされたことはなかった。……というか、異性からそういう目で見られたことなんてない。

だからもちろん、ナンパや痴漢なんてのにも遭ったことはなかったから、平和に十六年間を過ごしてきたのだ。

それが私——神崎咲子の人生だった。

なのに。

——それなのに。

「好きやで、咲子ちゃん」

到底、告白をしている風な表情に見えない藤原さんの両腕に封じ込められて。

「……………っ！」

こんな状況にどうしていいかわからない私の頭の中は、パニックに陥っていた。

ここはバイト先の倉庫部屋。

いくら離れているからって、大声さえあげれば届くはずだ。

でも、肝心の声が……出ないっ……。

「まあそんなに怯えんというや、何も今、やろうちゅーとんやないんやし」

「……………」

何を藤原さんがやろう、と言ったのかなんて考えたくもない。

ただもう、早く藤原さんから逃れたい！

それしか今は頭にはなかった。

だから、藤原さんの目がずっと鋭くなったのを私は見ていなかった。

「せやけど……味見くらいはさしてな」

「——!!」

顎を持ち上げられて顔を近づけられる。

キス、される——!!?

「いやっ!!」

ようやく声が出たと同時に、思い切り藤原さんを突き飛ばした。油断していたのか、藤原さんの体思ったよりも飛んだ。

「おっと」

その隙に私は扉まで駆け寄る。

鍵を外して外にさえ出れば……!

けれど私のその希望は、藤原さんに捕まることでたやすく無くなってしまった。

掴まれた腕ごと引き寄せられて、私はまた藤原さんの腕の中に封じ込まれてしまう。

「そんなに嫌がらへんでもええやんか……山田さんにはやらせておくせに」

（私と信也さんはそんな関係じゃないのに……!どうしたらいいの!?!）

鼓動が早くなる。

絶体絶命のピンチだ。

そんな中……頭の中に浮かぶのは、大好きなあの人のこと。

——ああ、こんなことなら、信也さんに好きって言えば良かった!

——そうだよ。

私まだ、信也さんに本当のこと伝えてない……!

私、何もしてない。

そう考えたら、無我夢中で信也さんと呼んでいた。

「し……信也さんっ！！信也さん……！」

震える声。抵抗する手には怖さから力が入らない。それでも私はありつた力の力で藤原さんに抵抗する。

「こんな時に他の男の名前出すなや……っ」

抵抗する私にいい加減イラついてきたのか、藤原さんの声が低くなる。

——怖い……！

そう思った瞬間。

ふわりと体が浮き……そして鈍い音と共に体が床に押し付けられた。背中に痛みが走る。

「……っ！」

「咲子ちゃんが悪いんやで。下手に抵抗したりするから……」

もう藤原さんの顔に笑みは、ない。

藤原さんの片手が、私の体に伸びる――。

（いや……！！！）

もう――駄目……！。

と、次の瞬間。

バンッ！

「……！」

鍵をかけられている扉の向こうから、強い衝撃がきた。誰かが扉を強く叩いている。

「咲子ちゃん！ここにいますか！？」

（！……信也さん！！）

聞き間違えるはずなんてない。

扉の向こう側にいるのは、確かに信也さんだ！

「信也さん……た、助けて……！」

「咲子ちゃん!？」

私のただならぬ叫びに信也さんが動揺したのがわかった。

藤原さんは私を押さえ付けたまま扉を凝視し、やばい、といった表情をしている。

そして。

カチャリと金属的な鍵の音と、弾けるように壁に叩きつけられた扉の音はほぼ同時だった。

「咲子ちゃん!」

開け放たれた扉の向こうから、まだバイト着さえ着てない信也さんの姿が現れた。

（信也さん——!!）

一瞬、私の願いが見せた幻かと思った。
でも、違う。

確かに信也さんはそこにいる——!

床に押さえ付けられたままの私と藤原さんを見た信也さん。

「っ……まえ! 何してんだ!!」

今までに見たこともない形相に変わった信也さんが、見えぬ早さで藤原さんに駆け寄る。

「やべっ……」

と私から離れようとした藤原さんだった——が。「きゃあ……!」

「ぐあっ!」

殴られる鈍い音と激しく倒れる音。

気付けば信也さんが倒れ込む藤原さんの前に立ち、睨みつけていた。

（信也さんが……殴った……!？）

信也さんに助けられた私は、壁に背中を預けへたりこんでいる。

信也さんから、目が離せられない。

「てめえ……何してた」

……それは聞いたこともない、低い、抑揚のない声。

私に向けられた声じゃないのに、ビクン、と私の肩が揺れた。

「や、やだな」山田さん……冗談ツスよ、冗談……」

そう言う藤原さんの顔はひきつっている。途端に、信也さんはカッとなって藤原さんの胸倉を掴んだ。

「……っざけんな!!」

(——あ!駄目……!)

駄目!

そんな風に魔法の手を使わないで——!!

「やめて!信也さんっ!」

気付けば私は、信也さんの振りかざされた腕を必死になって止めていた。

「咲子ちゃん……!?!」

「駄目です……こんな風に……殴らないで!」

こんな風に、魔法の手を使わないで……。信也さんの手は、私を幸せにしてくれる手なの——。

ぎゅ、と信也さんの腕にしがみついた。

心臓の音はやたら早くて、それがさっきまでの危機のせいなのか信也さんがいるせいなのかはわからない。

でもとにかく私は、信也さんに人を殴ってほしくなかった……それだけだった。

「咲子ちゃん……」

信也さんの表情が、落ち着いていく。

ああ……いつもの信也さんだ……!

——と、その隙に床にへばっていた藤原さんがあたふたと部屋から逃げ出す姿が目端に映った。

が、しかし。いつからいたのか、扉には怖い顔をした店長が仁王立ちをしてそこにいた。

「逃がさないわよ、藤原くん」

「て、店長!」

藤原さんの声がひっくり返った。

「今までバイトの女の子たちがバタバタ辞めてったのは、やっぱりあんたが原因だったのね」

え、そうなの!?

確かにウエイトレス不足だからこのバイトに誘われたけど……藤原さん前々からこんなことを!?

「い……いや、その……」

藤原さんの顔はひきつる。白状しているようなものだ。

——途端、店長のドスの効いた声が静かに響いた。

「ふざけんじゃねーぞ……このクソガキ」

「!」

しかし次の瞬間にはにっこり笑い、藤原さんの耳を引っ張っていった。

「まあお仕置きは後ですからあんたは仕事に戻りなさい」

「い、いで!」

ぐいぐい藤原さんを引っ張っていく店長は、一瞬私に優しい目を向けて扉を閉めた。

パタリ——と静かに響いた部屋に、私と信也さんだけが取り残された。

私は今だに信也さんの腕にしがみついたまま……何も考えられないでいた。

——ええと……今、何が起きていたんだっけ。

店長が来て……信也さんが来て……。

信也さんが藤原さんを殴って。でも私は殴る信也さんを見たくなくて、止めて。

でも、そもそも信也さんが藤原さんを殴ったのは……。
殴ったのは……。

「あ……」

突然振り返した恐怖感。

あのまま信也さんたちが来なかったら、私……今頃……っ。

「……ふえ……っえ」

「さ、咲子ちゃん！」

——それは恐怖感からじゃなく、安心感からきた……涙。

怖かった……本当に怖かった……！

震え出した体を止めることができてなくて、私は信也さんから手を離して自分の体を抱きしめた。

涙は止まらなくて、情けない鳴咽が溢れ出す。

「……う、ひつく……う……っ」

もうわかんない。

頭がぐちゃぐちゃで、涙の歯止めが効かない。

そんな私を見て信也さんはどう思っているだろう。

そんなの、困っているに違いない。

けれど……。

「咲子ちゃん……」

——ふわり、と温かい何かに包まれた。

それは信也さんの胸の中。

床に座り込んで泣いている私を、信也さんは静かに抱きしめていた。遠慮がちに緩めに私を包む腕の温もりが、すごく……気持ちいい。

（信也さん……っ）

——ひどいよ信也さん。

そんなの逆効果だよ。

温かい腕の中。

安堵を得た私は、何だかますます泣きたくなくて、さらに声を上げ

て泣いた。

いつの間にか信也さんに寄り添うようにしがみついても、信也さんは静かに抱きしめて頭を撫でてくれた。

——そう、この温もりが……欲しかったんだ……。

17 欲しかった温もり (後書き)

相変わらず遅い更新ですみません(汗)それと、コメント・評価ありがとうございます！私にとってこれ以上の元気の素はありません！コメントに関しては返信機能が付いたので、小説が終わったらコメントをしてくださった皆様にそれぞれ返信させていただきます(＊＾|＾＊)でも「キレイの魔法」はまだ続くのでかなり遅くなるかと…(汗)こんな春野桜ですが、頑張って書きますのでよろしく願いますm(_____)m

18 〽それは甘い裏切り〽

それはとても安らかな時間だった。

私を包む体温は温かく、背中をさする手は心地良い。

トクントクン……と心臓の音が柔らかく耳に響く。

人の体温がこんなにも安らぐなんて、知らなかったな……。

しかしふと気付く。

――私、今……何をしているの!?

バツと顔を上げた。

「咲子ちゃん?」

そこには急に動いた私を見つめる信也さんの顔があった。

そしてその顔は今までにないくらいの近距離にあつて。

そこで私はようやく、信也さんと抱き合っているという何ともこつ恥ずかしい行動をしていた自分に気付いたのだった。

（――わ、私ったらなんて大胆なことを!）

「ご、ごめんなさいっ」

慌てて信也さんの胸を押したが、あまり効果はなくまだ胸の中におさまっている。

信也さんはきよとした表情をしながら、けれど腕の力は弱めない。

「咲子ちゃんどうしたの?」

「その……急に泣き出したりして……ごめんなさいっ」

気付けばもう涙は引っ込んでいた。

涙が乾いた頬を擦る私は、恥ずかしくて信也さんと目が合わせられない。

「いいんだよ、泣いて当たり前だよ。……もう大丈夫？」

「……はい」

小さく頷くと、信也さんが頭をポンポンとたたいてくれた。

（あ……）

私にいつもしてくれる仕草だ。

魔法の手で優しく頭に触れてくれる——この瞬間が……たまらなく幸せ。

ぎゅうつ……と胸の奥が熱くなった。

「ほんと、咲子ちゃんが無事でよかったよ」

信也さんはそう言つと、また私を腕の中に閉じ込めた。

私は今度は素直に身を任せた。

「あの……、どうやって中に入れたんですか？鍵がかかっていたのに」

「ああ、店長から合鍵借りたんだよ。……でも買出しから戻った時は焦ったよ。藤原と咲子ちゃんの姿が見えないんだもん」

苦笑とも拗ねた表情ともとれる何とも曖昧な顔をして、信也さんは私を見つめる。

（信也さん……！）

きっとこれ以上、この人に嘘をつくことなんてできない。

こんなにも真つ直ぐに見てくれる人を……私は……。

（手放したくない……）

——それは初めて感じた欲だった。

美央の暗い表情も、悲痛な声さえも、今は頭の隅に追いやられていて。

押し留めていた気持ちが一気に溢れ出てくる。

美央……ごめん。

「信也さん……」

ゴクン、と静かに喉を鳴らす。

それは、人生で初めての告白だった。

「私……信也さんが好きです」

——もう、限界だった。

今言わなかったら絶対に後悔する……そう思ったら。

想像以上にすらりと言えた台詞に、私自身が驚いた。

不思議と気持ちちは落ち着いていて、心臓は心地良く鳴り響いている。

「咲子……ちゃん」

信也さんは一瞬目を大きく開かせ——そして笑った。

「やべえ……つまジ嬉しい……！」

かああ……っと顔を赤く染めた信也さんは、手で口を抑える。

そんな信也さんを見るのは初めてだ。

私は静かに鼓動を鳴らしながら、言葉の続きを紡いだ。

「今更……て思われても仕方ないかもしれないけど、私やっぱり信也さんが……」

「……」

「信也……さんが……」

——好きです、と。

言いたいのに急に言えなくなったのは。

目の前にいる信也さんが、嬉しそうにニヤニヤと私を見ているからだった。

さっきまで、真っ赤になってたのに！

「咲子ちゃん、続きは？」

ニヤニヤ……いや、ウキウキとも表現できる信也さんに見守られているうちに、急に私の心臓が早くなった。

今更ながらに、告白の緊張が襲ってくる。

「す……っす……」

「ん？聞こえないよ」

（し、信也さん面白がってる！？）

台詞の続きなんてもうわかりきってるくせに、催促してくる信也さんに私は困ってしまう。

「し、信也さん意地悪です……」

壊れそうなくらい鳴り響く心臓に困り、私は恨めしげに信也さんを見上げる。

「意地悪なのはそつちでしょ？好きなのに好き、て言ってくれなかったんだから」

「う……」

信也さんの告白から逃げた私に、その言葉は痛かった。

しゅん……となると、信也さんは苦笑してまた頭をポンポン叩いてくれた。

「ごめん、嬉しすぎてつい意地悪した。でもその言葉をもう一回どうしても聞きたいんだ。……駄目？」

ふるふる、と横に首を振る。

私だって言いたい。

溢れ出すこの気持ちを。

素直に。

「……好きです」

「……うん、俺も。……大好き」

穏やかに応えてくれた信也さん。

——こんなに幸せなことって、ない。

信也さんはさらに私を強く抱きしめてくれて、その幸せな圧迫感に私は酔いしれた。

（信也さん……大好き……）

このまま時間が止まればいい。

信也さんの温もりに浸ったまま、止まればいい。

けれど、信也さんが言った台詞に、私は一気に現実世界に舞い戻った。

「俺、美央に殺されるかもな」ついに咲子ちゃんに手出しちゃったから」

はは、と笑う信也さん。
私は一瞬身を固くした。

（美央……！）

途端に、心の奥からどつと何かが押し寄せてきた。
それは多分——美央への後ろめたさ。

『咲子がおにいちちゃん好きだなんて、認めないから！』

——美央のあの叫びを、忘れたわけじゃない。
でも結局私は、信也さんと両想いになっちゃった。
美央を——裏切ってしまった……。

（美央……美央に私はどうしたら……）

私は、きゅつと唇を結んだ。

これ以上、美央を裏切りたくない。

「あ、あの……信也さん」

「ん？」

「美央には言わないでください……このこと」

「え、何で？」

「私から言いたいんです」

裏切りたくない——だから、私から伝えよう。

信也さんと付き合うことを。

美央の本心はいまだにわからないけれど、私はちゃんと美央と向き合いたい。

だから——逃げてちゃ駄目なんだ。

「ん、わかった。じゃあ絶対言わない」

ポンポンとまた私の頭を叩く。

ありがとう……信也さん。

と、心の中で感謝していたら。

「じゃあさ、口止め料の代わりにチューしてね」

「え！？」

突然のお願いに、私は真っ赤になった。

ち、ち、チュー！？

「そ、チュー」

語尾にハートマークがありそうなくらいニヤついている信也さん。その笑顔は意地悪な感じは微塵もなく、本当に純粋に催促しているみたいだった。

わ、私、男の人と付き合うの始めてなんですけど！？

だからもちろん、キ、キスなんてしたことないんですけど！？

動揺する私をよそに、信也さんはただ嬉しそうに困る私を見つめているだけ。

（——ああ、もう！）

困っていても仕方ない！と思った私は、最大の勇気を振り絞って——キスをした。

……右ほっぺに。

「あれ？」

「い、今はこれで勘弁してくださいっ」

心臓はドキドキどころかバクンバクン。

目も合わせられなくて、床を見つめるほかない。

必死にそう言つと、信也さんは今日何度目になるかわからない抱擁を繰り返した。

「咲子ちゃん、めっちゃ可愛い！！」

それは一番きつい抱擁だった。

正直、苦しい。

「し、信也さ……く、苦し……っ」

「あ、ごめん！」

しまった、と呟いた信也さんは腕を緩めてくれた。

——そして。

「ファーストキスはまた今度な」

そう耳元で囁かれて。

私は倒れる寸前になってしまったのだった。

それから店に戻ると、店長が『二人とも帰っていいわよ』と言ってくれた。帰り際に『よかったわね』とも言ってくれて、店長には感謝してもしきれない。

藤原さんはもしかしたらクビかもな……と信也さんが呟いた。

私は私服に着替えると、信也さんと一緒に帰った。

「彼女を家まで送るのは彼氏の義務でしょ」

と言った信也さんに、私は至福を感じた。何だか、夢みたい……。

「じゃあ、また今度ね」

「はい、また」

家の前で信也さんとさよならをすると、私は玄関を開けた。気持ちはまだ夢見心地で、フワフワしている。

（信也さん……大好き）

靴を脱いで玄関を上がろうとした——その時。

（——え……？）

それが目に留まり、私は凝視した。

見覚えのあるピンクのミニール。

ミニールを履くのはこの家で私くらい。でもこれは絶対に私のじゃない。

だって……。

だってこのミニールは……！

「美央……！？」

目を見開いた次の瞬間。

私は脱ぎかけた靴を放り出し——玄関を上がったのだった。

19 Best Friend

まず、リビングに向かった。

けれどそこにはソファーに座りながら、広告チラシを見ているお母さんしかいなかった。

「お母さん！私の友達来てない？」

お母さんは突然現れた私の大きな声に驚きながらも答えた。

「ああ、あの子やつぱり咲子の友達だったの？稔が連れてくるもんだから、てつきり稔のガールフレンドかと思っただわ」

——み、稔！？

……もしかしてあのミュールは稔の取り巻きの子なの？
でも見覚えのあるあのピンクミュールは……。

とりあえず確認するしかない、と私は自分の部屋と稔の部屋がある二階へ行こうとリビングを出た。

そして階段を上がろうとした——その時。

「よ、咲子帰り早いじゃん」

階段の上で稔が立っていた。

「稔！ね、今来てる女の子って……」

あんたのガールフレンドなの？と続く台詞を、稔が遮った。

「話以上に美人じゃん、美央ちゃん」

にやりと笑った稔。

——やつぱり……！

やつぱりあの見覚えのあるミュールは、美央のものだったんだ！

でも、何で……。

「なんで稔が美央を家に連れてくるわけ？」

当たり前に浮かび上がる疑問が、自然と口からこぼれた。

稔は階段を降りると、すれ違いざまに私の肩をたたきながら答えた。

「家の近くの公園でナンパしたただだよ」

「はあ！？」

振り返り階段を降りて行く稔を見るが、稔はひょうひょうとした態度を崩さない。

「美央ちゃんは咲子の部屋にいるよ。早く行ったら？」

——気のせいじゃない。

稔はにやりと笑っている。

でもそれがいつもの意地悪なものからではなく、何か意図的に笑っているような……。

（いや、それよりも、美央だ！）

何故稔が美央を連れてきたのかは気になったが、それよりも美央の存在が重要だ。

今まで私を避けていた美央。

信也さんを好きなんて、認めないと言った美央。

泣きそうな顔をしながら、雨の中走り去った美央。

あなたの本心は、一体何なの——？

稔の姿が消えると、私は一気に階段が上がった。

角にある自分の部屋の扉を、焦る気持ちを抑えきれずに荒々しく開けてしまった。

「美央！」

中に入るとそこには、久しぶりの私服姿の美央がいた。

白のベアトップにパステルイエローのパーカーを羽織り、ジーンズスカートを履いている。

——ああ、やっぱり可愛い。

久しぶりの感想がそれかい！……みたいな感じだけど、それが素直な私の一番に考えたことだった。

美央はクッションの上でちょこんと座って、突然入ってきた私を見ている。そして。

「え……と、お邪魔してます」

少しかだけ笑うとそう言った。

（あ——！美央が……笑った！）

遠慮がちな笑みではあったが、確かに笑ってくれたことに私は喜ん

だ。だって前別れた時は、泣きそうな顔をしてたから――。

……いや、泣いたのは私の方だけだ。

「い、いらっしやい……」

そして喜びに打ち震えた私は、マヌケにもそう答えてしまった。

――ああもう！私っておバカかも……。

「ごめんね、突然来ちゃって」

美央が謝るもんだから、向かい側に座って私は慌てて言った。

「あ、ううん、全然大丈夫だよ！それよりも、よく私の家分かったね」

「近くの公園にいたら……稔くんが声かけてきてくれたから」

――やっぱさっきのナンパ発言は本当なわけ？

ハーレム持ちの弟の将来が心配になりそうだ。

美央はなおも言葉を続ける。

「咲子に……会いたくて。名簿の住所たよりに来たの。迷っちゃって公園で困ってたら、稔くんが声かけてくれて……でもまさか、稔くんが咲子の弟だとは思わなかったよ」

「よく言われるから」

ハハハ……と苦笑いすると、私は表情を改めた。

美央が言った台詞が気になったから。

「美央、私に会いに来てくれたんだね……？」

今まで散々避けられていたから、すごく嬉しかった。

美央はらしくなく小さく頷くと、私を見つめた。

いつものあの、優しくキレイな瞳を弱気にさせて――。

「咲子……ごめんなさい……！」

そう言った美央は泣くのを堪えているようだった。

「ホントはあんな風に言うつもりじゃなかったの……っ。ごめんなさいっ」

あんな風に――それは多分、エデンのことを指したのだろう。

私はかける言葉が見つからず、美央の次の言葉を待った。

俯く美央は、ぼつりぼつりと言葉を紡ぎ始めた。

「私あれ以来ずっと後悔していて……何であんなこと言っちゃったんだろうって」

そう言う美央は本当に後悔しているようで、悔しそうな表情をしていた。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい！」

「み、美央、いいよそんな……」

ひたすら謝る美央に私は慌てて言う。

そんなに謝らなくてもいいんだよ、美央。

それよりも、私が聞きたいのは――。

「美央、教えて……。何であの時反対したの？」

聞きたいのは、それだった。

美央が一瞬目を見開き、そして口をぎゅっと結ぶと、意を決したように口を開いた。

美央、あなたが反対した理由は――？

「なんか……寂しかったの！」

「え？」

思いがけない美央の言葉に、今度は私が目を見開いてしまった。寂しかったって……。

「何で寂しかったの？」

「だって、私は咲子の友達でおにいちやんの妹なのに、その二人が恋愛関係になっちゃったら寂しくなっちゃうじゃん！」

突然まくし立てたれた美央の台詞にドキツとした。

も、もう付き合うことになってしまったのだけれど……。

――でも。

美央そんな理由で反対をしていたの？

……バ力だなあ。

何だかふんわり心が軽くなった。

あのね、美央、そんな心配することないんだよ？だって……。

「美央、私のキレイの魔法使いは誰だか覚えてる？」

突然の私の変な質問に美央がきよとした。

「え……と、……私？」

おずおずと答えた美央に、私はにつこり笑った。

「そう！私の魔法使いは美央だよ！美央が傍にいたくちゃ、私キレイになれないんだから」

美央、私は何を言いたいかわかる？

まだ首を傾げる美央に、私は苦笑しながら続きを言った。

「だから美央、ずっと傍にいてね。ずっと……友達でいてね」

——正直、そんな事を言うのはとっても照れくさいことだった。
でも、言わなきゃいけないって。
今の美央を見て思ったの。

すると、硬い顔をしていた美央の表情が、少し和らぎ……。

「うん」

美央がそう言ってくれた。

柔らかい温かな空気が私たちを包んだ。

今までの冷却時間をゆっくり溶かしていくような、そんな優しい空気。

よかった……これでまた元に戻るんだね。

笑顔が浮かび上がった美央に私は安堵し——そして真剣な面持ちになった。

これは、隠しちゃいけないことだから。

「あのね、美央」

顔を上げた美央に向けて、私は緊張しながら言った。

「私、信也さんと付き合うことになったの」

「え？」

案の定美央はびっくりしてしまった。

当たり前だろう、当本人の私でさえ信じられない事実なんだから。

美央はこれをどう受け止めてくれる？

しばしの沈黙の後……………。

美央は、笑った。

「やだもう！おにいちゃんってば手が早いんだからあ！」

それは前と変わらない笑顔だった。

「それなら咲子、ますます可愛くならないとね！おにいちゃんの学校にはお洒落な人たくさんいるんだから、負けないようにしなくちゃ！」

「美央……………」

いいの？

私、信也さんと付き合ってもいいの？

「どうしたの咲子、変な顔しちゃって」

「え…………あの、いいの…………？その、付き合っても……………」

そう言ったら、美央がくしやりと仕方なさそうに笑った。

「もう、私が変な態度取ったからそう思ったの？…………確かに最初は寂しいって思ってた嫌だったけど……………」

そこまで喋ると美央は一呼吸置き。

「ワガママ言ってちゃ駄目だよね！親友の幸せを喜ばなくちゃ！」

——親友——。

前にも言われたことあったけど、今の方がずっと心に響いた。

ありがとう…………ありがとう、美央。

「…………さてと、私そろそろ失礼するね」

「え、もう？」

もう帰っちゃうの？せっかく仲直りできたのに。

「うん、塾もあるし」

「あ、そっか。ごめんね、引き止めて」

「やだなあ！勝手に来たの私だよ？あ、その前にちよっとお手洗い

貸してもらってもいい？」

「うん、どうぞ！出て真っ直ぐのところにあるよ」

美央と仲直りできて私は何だか晴れ晴れとした気持ちになっていた。

——けれど私は知らなかったんだ。

私の部屋を出て、美央が外で待ち構えていた稔とこんな会話をしていたことを。

「その顔だとちゃんと言えなかったんだろ？」

「…………稔くん」

「美央ちゃんの悪いところはプライドが高いところと欲張りなところだな」

「な…………によ、さつき会ったばかりの稔くんに、私の何がわかるのよ！」

「わかるから困ってるんだろ、俺美人には優しいからさ。だから…………協力してやるよ」

「え…………？」

そう、私は……………知らなかったのだ。

20 幸せな眠り

その着信音を聞き間違えるはずがなかった。

美央が帰った後の部屋の中、突然鳴り響いた携帯電話に慌てて私は出た。

——信也さんの着信音だったから。

「は、はい、もしもし！」

……あ、声裏返っちゃった。

そんな事を後悔する間もなく、私の好きな信也さんの声が耳をくすぐった。

『もしもし、咲子ちゃん？』

「は、はい」

突然の電話にかなりドキドキしている。

両想いになったのはついさっき……何だか落ち着かなくて、座るクッションを指で弄っていた。

『ごめんね突然電話して』

「い、いえ！何か用がありましたか？」

そう言うと、電話の向こうから苦笑する声が聞こえた。

え、私何か変なこと言ったかなあ？

不安になっていると、信也さんがやんわりと苦笑しながら言った。

『咲子ちゃん、敬語使うのやめようよ』

そして、続けてこう言った。

『……付き合ってたんだしさ』

——ドキン、と鼓動が大きく跳ね上がった。

信也さんにそう言われると、夢物語みたいだった出来事が現実なのだと自覚され——途方もない幸せに胸がいっぱいになる。

——私が、信也さんの彼女。

——信也さんが、私の彼氏。

甘酸っぱい何かが、さらに呼吸を苦しくさせるから。

「はい……」

私にはそう言うことがやっとなかった。

そしてさらに電話の向こう側の信也さんは、私を呼吸困難にさせるようなことを言う。

『まあ、電話したのは……声、聞きたかったただだからさ』

——信也さん……っ。

ああ、もう！

そんなに私を虜にさせようとししないで下さい！

「し、信也さん……」

『はは、照れた？俺も今照れた』

「もう……からかわないで下さいっ」

そう言う私の顔はかなりにやけていた。

美央とも仲直りできたし、信也さんとこんな風に電話ができて、私はまさに幸せの絶頂にいたのだ。

『……咲子ちゃん、もう大丈夫？』

「え？」

一瞬何が大丈夫なのかわからなかったけれど、すぐに藤原さんのことだと気付いた。

そういえばそうだった……。

信也さんと両想いになったのと美央と仲直りできた喜びから、すっかり頭の中から放り出されていた。

「はい、大丈夫です」

『そっか、ならよかった。……もう少し早く行けたらよかったのにな。ごめんね』

「そんな！信也さんが謝る必要ないです！」

そудだよ、必要ない。

だって……。

「……あの時信也さんが来てくれてすごく嬉しかったです。……
心の中で呼んだら本当に来てくれて、感動しちゃって」
あの時ばかりは本気で神様の存在を信じてしまっくらい。
嬉しかったの。

『……………』

——あ、あれ？

信也さん無言……？

少し不安になると、信也さんが電話越しにため息をついた。

『……咲子ちゃんってさあ……………』

「は、はい？」

——な、何？

『ほんと、可愛いな』

「——え！？」

はへ！？可愛い！？

思いがけない嬉しい台詞に私は真っ赤になってしまっ。

ふ、不意打ちは……ずるいつ！

『無意識だから余計質が悪いな』

「す、すみません」

『プツ……謝るとこじゃないし！それに敬語はやめてって言ったで
しょ？』

「あ、はいっ」

——じゃなくて。

「……うん」

そう答えたらますます信也さんは笑ってしまった。
私って……よっばどおバカなのかしら。

その後、信也さんとはとりとめのない話をした。けれどその何でもない話がすごく楽しくて。

気付けば三十分も信也さんと話してしまっていた。

切る時は名残り惜しかったけれど……大丈夫。

また、会えるから。

（——ああもう、幸せっ！）

あまりの幸福感に、私は思わずベッドにダイブした。バフツ、と思い切り沈んで全体重を任せる。

——もうダメ。幸せ過ぎ。

こんなに幸せでいいのかなあ……？そんなことを考えていたら、部屋の扉が開いた。

ノックもせずこんな風に入ってくるのは……あいつしかない。

「稔、どうしたの」

稔が姿を現した。

稔は私の質問には答えずにニヤニヤ笑っている。

「何か幸せそうじゃん？咲子」

「なっ……聞いてたの！？」

「バーカ、顔見たらわかるって」

……私の顔って、そんなに正直？

とりあえず私はベッドから身を起こしコホン、と咳ばらいをした。

「そ、それよりも稔！ナンパなんて恥ずかしいことやめてよね」

「何で？出会いを求めているだけなのに」

もー、このマセガキ！

出会いなんてなくても、あんたは充分モテてるでしょう！

「よりによって私の友達にしないよね」

「ああ、美央ちゃん可愛いよね」

噛み合わない会話はいつものことだ。

しかしチラリと私を見た稔の瞳は、いつもと少し違っていた。

何か企んでる……？

「美央ちゃんめっちゃ好みなんだよね」

ニヤリ……と稔の口角が上がった。

「だからダブルデートしない？」

「ええ！？」

——ダ、ダ、ダブルデート！？

不意打ちのキーワードに私は思わず口をあんぐりと開けてしまった。
だ、だって、稔と美央はついさっき会ったばかりじゃないの？

てか、私まだ信也さんと付き合い始めたばかりでデートしてない人
だけど！

「だ、だめだよ！」

「何でさ？俺は美央ちゃんとデートしたい」

「そ、それなら勝手にすれば……」

……と言いかけてそこで気づく。

ちよつと待て、勝手に稔が美央に毒牙をかけている方が問題ではないか？

稔には悪いけれど、私はできれば美央に稔を近づけたくない。

だって稔の女癖の悪さは姉である私がよく知っているもの。

と言うか、まだ中学一年生の弟が自分の友達に言い寄る……てのは
かなり姉として恥ずかしいのだけれど！

そう考えるとダブルデートが私の中でイイ安全策のように思えてき
た。

「んん……じゃあ、美央と信也さんにちよつと聞いてみる」

「やり！日にちはそっちで決めてくれていいからさ」

二カッと笑う稔には申し訳ないけれど、頭の中では美央にどう忠告
しようかと考えていた。

稔……悪いけど美央にはちゃんと言っておくからね、あんたの悪癖
を！

「じゃ、美央ちゃんによろしく」

軽やかに部屋を出て行った稔を見送ると、私はふう、と息を吐いた。

何だか今日はいろんなことがありすぎて疲れちゃったな。

でも、いい事ばかりだったからそんなに嫌な疲れじゃない。
むしろ晴れ晴れとしているよ。

私はまたベッドに沈むと、静かに目を閉じた。

美央には学校で相談して……信也さんにはバイト先で声をかけようかな。

いきなり私の弟とダブルデートして下さい、なんて言ったらどんな顔するかな。

こみ上げる笑いに私の心はくすぐつたくなる。

——ああ、幸せ。

心地よいだるさに包まれて、私はそのまま眠りに入ってしまった。

そのダブルデートで稔が何を企んでいるかなんて、その時は知りもしなかったけれど——。

21 決戦は土曜日！??

最近買った淡いピンクの膝丈ワンピース。

それを着た私は、鏡の前で最終チェックをする。

「よし！変なところはないね……っ」と

いつも以上に入念にチェックをする。

だって今日は、初デートだから！

——とは言っても……。

「おい咲子、ノロノロしてんなよ」

二人きりのデートではないのが少し残念だったりする。

「今準備できたところ！」

すでに準備を済ませた稔が部屋を覗いてきたので、私は慌てて答えた。

信也さんと付き合いだしてから一週間経ち、今日は土曜日。

稔に頼まれていきなりダブルデートをすることになってしまったが、信也さんも美央も快く了解してくれた。

最初は微妙かなあ……と思っていたけど、日にちが経つにつれて楽しみになってきた。

だってやっぱり初デートなわけだし。

それに信也さんや美央と遊べるのは素直に嬉しい。

だって二人とも、大好きだもん。

「行つてきまーす」

稔と一緒に家を出ると、駅に向かう道を歩き始めた。

駅で信也さんと美央と待ち合わせをする予定だ。

ちなみにデート場所はベターかもしれないけれど遊園地。

ダブルデートの定番といえば、やはりこれでしょう！……と言ったのは稔である。

「美央ちゃんどんな服着てくるかな」
楽しみに言う稔。

黒のロンTに白いクラッシュデニムのパンツを着こなす稔は、姉の私から見てもオシャレでカッコイイ……かもしれない。けどね稔、今日こうしてダブルデートに乗ったのは、あんたの毒牙から美央を守るためなんですからね！

「稔、美央に変なことしないでよ」
ジロリ、と睨む。

稔は「さあね」と鼻歌を歌うように答えた。
まったくもう！

気楽で女好きな弟を持つと、苦労するよ……。

「あ、咲子こっちこっち」

「美央！信也さん！」

駅に着くと、時計台の前に二人はいた。

土曜日だけあって人通りの多い駅前だったけれど、美男美女の二人は、遠くから見ても目立っていた。

私と稔は二人の方へ早足で近づいた。

「おはよう、咲子」

ニコツと美央が笑って迎えてくれた。

「美央、おはよ！」

私も笑い答えると、つつい美央の服装をチェックしてしまった。
美央の私服は私にとって参考になるし滅多に見れないから、ついマジと見てしまうんだよね。

美央の今日の服装はリボン付きのはんぱ丈パンツにデザインシャツと元気な感じ。

そういえば私、今日遊園地だから結構動くのにワンピースとか着てきちゃった……。

しまった、と考えていたら。

「よ、咲子ちゃん。ワンピース可愛いね」

「し、信也さん」

信也さんがそんなことを言ってくれたから、そんな考えもどっかへ行ってしまった。

少し頬を赤く染めて、信也さんに答える。

「おはようございます」

「はは、ございますはいらないって」

「あ！そっか」

しまった、またやっちゃった。

この一週間、信也さんからは敬語禁止令が出されているのだが、なかなか私は直すことができないでいた。

どうやらすっかり身についてしまったみたい。

そんな私を見て微笑む信也さんは、いつも通りのジーンズパンツにロンドンだ。

普通の恰好なのに、どうして信也さんが着るとカッコ良く見えちゃうんだろう。

……なんてことを考えていたら。

「へえーあんたが咲子の彼氏で、美央ちゃんのお兄さんかあ」

隣にいた稔が、興味津々に信也さんを見ていた。信也さんはニッコリと笑う。

「ああ、そうだよ。君は、ええーと……」

あ、しまった！ここは私が紹介しなくちゃね。

信也さんには弟が来る、としか伝えてなかったから……。

慌てて私は二人の間に入った。

「えっと、信也さん紹介するね。これ、弟の稔」

すると稔が口を尖らせた。

「これとは何だ。咲子のくせに生意気」

「な、生意気はあんたでしょ！」

もー、稔ったら！

信也さんの前でくらい大人しくしててよーっ！

「プツ……稔くん面白いな」

しかしどうやら、そんな稔に信也さんは好印象を持ったみたい。

信也さんはくったくなく笑うと、稔に声をかけた。

「今日はよろしくな、稔くん」

「ん、こちらこそ」

稔はニツと笑うと信也さんと握手した。

……やっぱり、この二人似てるかも。

信也さんと初めて会った時も思ったんだよね、稔に似てるって。

それを今、ふと思い出してしまった。しかし次の瞬間。

「じゃあ美央ちゃん、今日はお兄さん公認のデートだからラブラブ
しよーね」

稔がそんなことを言って美央の手を握ったから。

「あーこ、こら、稔！」

そんな考えも吹き飛んで、私は慌てて稔を制した。

けれど……。

「はは！稔くんマジ面白い子だな」

信也さんは呑気にそんなことを言っている。

あ、あの、自分の妹が中学生に口説かれているんですけど……？い
いんですか？

美央はというと、突然の稔の行為にビックリしているようだった。

「あ、あの稔くん！？」

ほら美央困ってるじゃんー！

ここはひとつ、稔に釘を刺しておこう！と考えた私——だったが。

（えっ……？）

——それは不意打ちの温もり。

突然握られた右手に、動きが止まってしまふ。

私の右手を握っていたのはもちろん、信也さんで……。

「俺達も」

ニコツと笑ってそんなことを言う信也さんに、私は心臓が破裂しそうになっていた。

「し、信也……さん」

繋がれた右手が、熱い。

初めて信也さんと手を繋いで、私は体まで強張ってしまった。

——やっぱり信也さんと稔は似てるよ。

こんな風にあっさりと手を繋いで、相手を困らせるんだから——。

美央ごめん。

助け舟を出そうとしたのに、私まで捕まっちゃったよ。

今だけその困ったちゃんな弟を相手にして下さい。

……なんて思う私は無責任かしら。

「さあじゃあ行きますか」

ダブルデートの考案者である稔はそう言うと、切符売り場に向かった。

もちろん美央の手はしっかり握ったまま。

ああ、一体どんなデートになるんだろう？

安らかに晴れた土曜日の午前。

奇妙なふたつの男女の兄弟によるダブルデートが、スタートしようとしていた。

22 青空遊園地

彩りカラフルな真ん丸い風船。

あちこちに散らばる大きなアトラクション。

子どもたちのはしゃぐ声に、機械的な音と楽しい音楽が華やかなここは——遊園地。

小学校の時に家族で行った以来だった私は、アーケードをくぐった途端飛び込んできた景色に目を輝かせた。

「わあ……、すごい」

何がすごいんだ、というツツコミはこの際なしにして。

私はキョロキョロと辺りを見渡した。

うーん、何か懐かしい感じ……。

「咲子ちゃん遊園地は久しぶり？」

そんな私を見ていた信也さんが声をかけてきた。

「はい、久しぶり……」

……です、と続きそうになるのを慌てて飲み込んだ。

危ない危ない、また敬語を使うところだった。

そんな私を見て苦笑する信也さんはいつものことだけど。

信也さんは私の頭をいつものようにポンポン叩くと、稔と美央に呼びかけた。

「さーて、まず何乗ろうか？」

私たちの腕にはパスポートリングと言われる遊園地専用のパスポートが付いている。

これさえ見ればあとはどのアトラクションに乗っても自由なのだ。だから後は何のアトラクションにするかを決めるだけで——。

答えたのは稔だった。

「俺バイキング乗りたいなっ」

稔にしては珍しい、子どもらしい無邪気な発言。

「お、いーね！やっぱ遊園地といえば絶叫モンだよな」

「お兄さん話わかるねー」

——こらこら稔。いつから信也さんがあんたのお兄さんになったのさ!?

というツツコミを入れたかった私であつたが、冷や汗をややかいてしまふ。

実は私……絶叫系が大の苦手だったりする。

「うん、いーね!行こう行こう」

あう……美央までバイキングに賛成なの?

「よし、じゃあ決まり〜!」

稔が楽しそうに先頭を歩き出す。

しまった……。

家族で遊園地行った時なんて、稔も小さかつたし私が絶叫系ダメなんて知らないんだよね。

せっかくの楽しげな雰囲気なのに、ここで私だけ避けたらシラけちゃうよね。

私は無理矢理笑顔を作ると、皆と一緒にお叫びの聞こえるバイキングへと向かったのだつた。

「きゃー!」

「ひゃっほーい」

——なんて黄色い声が聞こえる中。

「……………っ!」

耐えられない恐怖と気持ち悪い無重量感に、私はぎゅっと目を閉じていた。

気分は……最悪。

何とか無事にアトラクションのプログラムを終わらせた私は、降りた途端足取りがふらふらしてしまった。

「咲子、大丈夫？」

「あ、平気平気」

美央がそんな私を見て声をかけてきた。

いけない、いけない！

心配させちゃだめ！

「久しぶりに乗ったからなんかフラフラしちゃった。でも全然大丈夫だからね！」

「そう？ならいいんだけど」

気丈に言い張る私に少し安心した美央。

その後ろで、バイキングでヒートアップしたらしい男が二人……。

「うわー、めっちゃ楽しかったあ！」

「お兄さん、次は定番の行きましようよ！」

「定番って……おお！あれかあ！」

——あの、お二人初対面は数時間前でしたよね？

なのにごい意気投合してるのはやっぱり、似た者同士だから？

「よっしゃ行くぞー！」

「おー！」

二人の少年はすっかり興奮しきって、遊園地の定番らしいジェットコースターに向かって走って行く。

「あ、ちよつと、おにいちちゃん！稔くん！」

美央が慌てて止めるものの、二人の姿は遙か向こう。

うーん、足が速いところまで似ているのか。

なんてくだらないことを考えている間に、すっかり二人との間は空いてしまっていた。

取り残された美央と私。美央はぷー、と頬を膨らます。

「もうおにいちちゃんたら！子どもっばいんだからあ」

「稔も乗せるの上手いしね」

互いの兄弟にため息をつく、とりあえず私と美央はベンチに腰掛

けた。

私としては座るのは嬉しいけれど、美央には申し訳ないなあ。

「美央は行かなくていいの？ジェットコースター」

「んー、別にいいよ。何だか二人のテンションについて行けなさそうだし」

「ふふ、確かに」

そう言つて二人で笑いあつた。

この間までケンカしていたなんて嘘なくらい、私たちの間にわだかまりはなかった。

「それにしてもいい天気だね」

美央が両手を挙げて伸びをする。

私たちの頭の上には無限に広がる青空。

もう夏の香りが含んでいて、真昼間だとじんわり汗も出てきそうなくらいだ。

「うん、いい天気」

さっきまでの気持ち悪さもずいぶん和らいでいる。

遊園地に来てまで日向ぼっこをしている私たち、もしかしたらおかしな二人なのかな。

——と、その時。

「あれえ、君たち二人？」

前を通りかかった五人グループのお兄さんたちが、私たちの前で足を止めた。

パツと見大学生くらい……かな。

「はあ……？」

突然のことにポカンと口を開けた私。

美央は一瞬不審げな顔をして相手を見ていた。

「俺らさあ、大学のサークルで遊びに来てるんだよね。女の子少なくて寂しいからさあ、良かったら一緒にしない？」

——ええと、もしかしてこれは……ナンパ？

きょんとしていると、隣に座る美央がすっと立ち上がった。

「行こう、咲子」

「え、あ、うん」

行ってしまう美央に置いてかれないように私は慌てて立ち上がった。大学生の男の人たちはそんな私たちをポカンと見つめる。

——あれ？前にもこんなことあったような……。

ふとそんな思いが頭を過ぎったが、美央が振り返って笑った瞬間そんなことも忘れてしまった。

穏やかな笑顔で美央はこう言う。

「まったく、ほんと男ってダメね。……ね、咲子、あれ乗ろう？」

そう言って彼女が指さした先には……。

「観覧車？」

遊園地のメインとも言えるアトラクション。

大きくそびえ立つ観覧車は、開園直後もあってかまだ人はまばらだった。

「そ、あそこならゆっくりできるし」

「んー、そだね」

信也さんと稔には後で連絡しとけば大丈夫よね。

私と美央は空いた観覧車へ向かって歩き出したのだった。

22 青空遊園地 (後書き)

初めての方もいつもの方も、読んでくださりありがとうございます！感想・評価はいつも励みにさせて頂いております！今この小説の季節は設定上六月下旬です この小説書き始めたのが去年の夏… (汗) ラストは近くなってきております♪

23 観覧車の中にて

観覧車は遊園地の一番奥に位置していた。

開園直後のせいかな人はまばらで、私と美央はすんなりと観覧車に乗ることができそうだった。

久しぶりの観覧車。

結構大きなその観覧車は、十五分ほど時間をかけて一周すると説明版に書いてあった。

「はい、お二人様ですね、どうぞ」

係りの人に案内され、赤色の観覧車に乗り込む。

中は意外と広く、二人で向かい合って座った。

「観覧車なんて久しぶり」

美央が外を見ながら笑って言う。

「私も」

つられて私も外を見たが、まだ地上に近い景色がゆっくりと動いているだけだった。

とりあえず美央の方を向くと、美央も外ではなく私を見ていた。

こんな風に向き合うのは、仲直りしたあの一週間前以来……かな。

ふと、美央が呟いた。

「稔くんに感謝しなくっちゃ」

「え？」

稔……？

何でいきなり稔の名前が出るんだろう。

しかもそんな穏やかな表情で『感謝』って――？

美央の呟きの意図が見えない。

美央は、少しだけすまなそうな顔をして私に言った。

「実はね、私まだ咲子に言っていないことがあったの」

「言って……ないこと？」

それは思ってもみない台詞だった。

美央がまだ私に言っていないことがある？

それは、一体――。

次の瞬間に言った美央の台詞に、私は目を見開いた。

「私実は……男の子が大っ嫌いなの！」

――それは、予想もしていないことだった。

「……え？」

男の子が……――大っ嫌い！？

ぽかんとした私を目の前に、美央は流水のごとくべらべらと話し出した。

「男の子なんて私が可愛くなかった頃は散々虐めてきたくせに、ちよつと可愛くなったら手のひら返した態度取り出すし！野蛮だし、スケベだし、最悪！って思うの！」

あ、あの……美央？

「女の子が傷つくこと平気で言うし、顔で選ぶしがきだし、ほんとにほんとに大っ嫌い！」

――そういえば前信也さんから聞いたつけ。

美央はもともと可愛かったんじゃないくて、努力して可愛くなったんだって……。

でもそのせいで、男性不信に――？

ア然とする私を前に一気にまくし立てた美央は一呼吸すると、こう言った。

「でも、おにいちゃんは別なの。私の……魔法使いだから」

――魔法使い。

それはキレイの魔法使いのことだと、すぐにわかった。

美央のせつなげな顔を見て、トクン、と私の胸が鳴った。

「おにいちゃんが私を変えてくれたの。可愛くなかった私に……魔

法をいっぱいかけてくれた」

……うん、わかるよ。

私も、そうだったから。

「咲子にも、同じ気持ちを味わってほしかったの。咲子を見てたら昔の私を思い出して……今度は私が、魔法使いになろうって思ったの」

美央にそう言われて、嬉しくないはずがなかった。そんな風に思ってもらえて嬉しかった。

けれど、素直に喜べないのは……美央のその表情が、言葉とは裏腹になぜか苦しげで。

言いたくないことを言おうと、頑張っているように見えたから。

そして次に出た発言に、私は息を飲んだ。

「でも……いつの間にか咲子の魔法使いは私じゃなくて、おにいちゃんになっていた。私の……魔法使いだったのに」

「……！」

——美央が言いたいことが見えてきた……気がした。

美央、もしかして……。

「馬鹿みたいでしょ、私咲子にヤキモチ妬いてたの。たかがおにいちゃん取られたくらいで」

あは、と笑う美央。無理をしているのがわかった。

じつと私が見つめていると、美央は乾いた笑いを一通り済ましてから、はあ……と息をついた。

「正直に全部言っね。私、超がつくくらいのブラコンなの」

「ブラ……コン」

「そ、かなりのの。実は今までおにいちゃんが付き合ってた相手、私が全部追っ払っていたの」

「え!？」

そう言われて私は大きく目を見開き、ふとある台詞を思い出した。信也さんと初めて会ったあの日、帰り道を一緒に歩きながら信也さんがもらした悩みを……。

『俺あんま気いきかないやつだろ？この性格でフラれてばつかなのに、治らねえなあ……と自己嫌悪なだけ』

——もしかしてフラれてばかりだったのは信也さんの性格ではなく……。

「まあおにちゃんは単純だから全部自分のせいって思っていたけど」

今正面にいる、美央のせい！？

私の頭は一気に混乱した。

ええと……美央は実は超がつくほどのブラコンで、信也さんがフラれてばつかなのは信也さん自身の問題ではなくて、美央が彼女たちを追い払っていたからで……。

（あれ、でも……）

そこでふと気づく。

もしかして私も今、その追い払われる立場にいるのでは？

考え込んでいた私はバツと美央の方へ顔を向けた。

そこには少しだけ居心地の悪そうな表情をした美央の顔。

「……でもね、今回は困っちゃった。だってよりによって私の大好きな咲子が相手だったんだから」

「！」

「おにいちゃんに彼女なんてできてほしくない。だから近寄ってくる人はみんな追い払った。でも咲子にはそんなことできなくて……すごい、馬鹿みたいだけど悩んだんだあ」

ああ……そうか。

エデンでミルフィューを置いていって去ったあの時も。

雨の中走り去ったあの時も。

私の部屋で一生懸命仲直りしようとしていたあの時も。

美央はずっと、私と信也さんとの間で揺れ動いていたんだ。

それは確かに美央が言うとおり、ちょっぴり馬鹿馬鹿しいけど……可愛い、と思わず私は思ってしまった。不謹慎かな？
だってまるで美央、だだをこねてる子どもみたい。

「馬鹿だなあ……美央」

思わずそう言ってしまった私は、つい笑ってしまった。
美央がそんな私を見て、心外だ、といった表情をする。

「あ、ひどい！だから言いたくなかったのに！」

ぷう、と頬を膨らませた美央はふざけているようだけど、顔が赤くなっていたからますます可愛く見えてしまった。

「私に信也さん取られなくなかったんだ？」

少しだけ意地悪そうに言うと、美央もそれに乗ってきた。

「もちろん！私だけのおにいちやんだもん」

「でも今は私が彼女だもんね」

「何よー！おにいちやんは私専用の魔法使いだもんね！咲子には譲らないよーだ」

ああ、やばい。

何だか楽しくなってきた。

「……ツプ」

それは二人同時の合図。

「ふふ……あはは！」

「あは！何だか私たち、馬鹿みたいだねー！」

ケラケラ笑い出した私たち。

多分、傍から見たら変な二人。

けれど私たちは何だか笑いが止まらなくて、しばらく笑っていたんだ。

そしてしばらく笑っていたら、美央が叫んだ。

「あ、見て！頂上！」

「え！？」

美央の声につられ外を見ると、私たちの乗る観覧車はいつの間にか頂上付近にきていた。

ミニチュアみたいな遊園地と青空が、目に飛び込んでくる。

「景色いいなー……」

美央が微笑みながら呟く。

私も同じように普段は見れないような外の景色を眺める。

そしてぽつり、と私は呟いた。

次は私が、素直になる番……。

「私……嬉しかったよ」

そんな私の呟きに、美央が反応するのがわかった。

照れ臭いから、目線は景色のまま続ける私。

「美央に魔法使いになってあげる、て言われて、すごく嬉しかったの」

——あれは、数カ月前の出来事だったよね。

「私今まで自分に自信がなくて、可愛くなったら自信持てるかなって考えてたけど可愛くなれなくて……」

——でも、私は出会った。

たった一人の魔法使い。

「だから嬉しかったの。美央が手をさしのべてくれて」

そして私は美央を見つめる。

「大袈裟だろうけど、美央に救われた気がしたの」

——それは紛れもない本心。

でも美央にそれを言うのは何だか恥ずかしくて、ずっと言えなかった。

でも、美央も本心を書いてくれたんがから、私も言わなくちゃ……！
そう思ってた台詞は、どうやら美央に届いたみたい。

美央は苦笑して、大きな声で言った。

「あゝあ！これだから邪魔できないんだよね、咲子は！一生懸命すぎて追い払うなんてできないよ」

そう言うとき美央は猫みたいに伸びをした。さっきとは違う晴々とし

た表情。

「まあ、ブラコンもそろそろ卒業……かな」

そう言った美央は、今までで見た中で一番キレイだった。

そして観覧車はいつの間にか、ゆっくりと地上目指して動いていた。

24 二人になろう、手を繋ごう

観覧車を降りると、信也さんと稔が出迎えてくれた。たた、と走り寄ってくるのは稔だ。

「やうと出てきた、美央ちゃん」

こらこら、私の存在は無視ですか。

そんな私に後からついてきた信也さんが声をかけてくれた。

「よ、観覧車楽しかった？」

「う、うん」

見上げるといつもどおりの信也さんの笑顔が見えた。

信也さん……まさか美央が今までの自分の彼女たちを追い払ったなんて、知らずにいるんだよね。

うーん、可哀想というか、素直というか……。

でもそういう意味では、私は美央に感謝をしなくちゃいけないのかもしれない。

だって美央のおかげで、信也さんは私と出会った時フリーだったんだから。

そんな事を私がかかえているとも知らない信也さんが、こそっと私に耳打ちをした。

「……ねえ、二人つきりになろうか？」

「え？」

信也さんの顔がすぐ横にあってドキリとする。

ううん、それよりも——二人つきりって!?

「よし、行くぞ！」

「きゃ!？」

気づけば私の右手が信也さんに捕まえられ、スタートダッシュを決めていた。

「あ！咲子、おにいちゃん！」

「あらら」

美央の驚きの声と稔ののん気な声が聞こえてくる。

そんな二人に信也さんは、無邪気に手を振ってこう言う。

「今から別行動な！邪魔すんなよー！」

（し、信也さん！）

信也さんの大胆な行動に、私は思わず赤面をしてしまう。

遠ざかっている美央の表情は苦笑していて、何やら口ばくをしている。

『じゅっくり』

そんな風に動いて見えたのは……私の都合のいい考えだったのかな？

しばらく走って二人が見えなくなると、信也さんは一息ついて二カ
ツと笑った。

私の好きな、悪戯っ子みたいな笑顔。

「やっと二人つきりになれた」

「信也さん……」

多少（というか、かなり）強引なやり方でも、こんな風に二人にな
れたのは私も嬉しい。

信也さんは繋いだ手をさらに強く握ってくれた。

「さて、じゃあどこ行きますか？」

「えーと……」

繋いだ手は照れ臭いけれど嫌じゃない。

はにかみながら悩んでいると、信也さんが前方を指した。

「あ、あれはどう？」

そう言っ指したのは大きな池に浮かぶボートだった。

結構広い池には、いくつかのボートが浮かんでいる。

信也さんにしては大人しい乗り物の選択だったけれど、絶叫系が苦手な私はホッとしてしまう。

「うん、面白そう」

笑顔でそう言ったら、信也さんはますます笑ってくれた。

「よし、じゃあ決まり！行こう」

「うんっ」

私たちは手を繋いだまま、大きな池へと足を運んだ。

25 キレイの素

二人乗り用のボートは結構狭く、信也さんの長い足が私を挟むようにして放り出されていた。

オールを持った信也さんは上手に漕ぎながら、広い池の中をまわっている。

他にも何組かボートに乗っている人たちはいたけれど、それぞれ離れた場所にいるから二人きりと言えば二人きりという状態だ。

「はー、さすがに疲れたな。ちよつと休んでいい？」

池の真ん中辺りになると、信也さんがそう言った。

「あ、はい！お疲れ様です」

「こら、また敬語」

「あ……」

——あちゃー、またやつちゃった……。

しまった、と思っていると、怒った顔した信也さんが耐えきれないようにプツと笑った。

「はは、まあそれが咲子ちゃんだから仕方ないか」

あつはつは、と信也さんの笑いがボート上に響く。

「す、すみません」

うう、さっきまではうまく敬語使わないでできたのにな。

ちよつと油断すると出ちゃうんだから、もう。

「謝らなくてもいいよ」

まだ笑ってる信也さんは、オールを手に添えたまま私を優しく見つめている。

そして穏やかな瞳を見せると——こう言った。

「そんな真面目なところが、咲子ちゃんの《キレイの素》なんだろうな」

(え……)
キレイの——素？

何か不思議なニュアンスの単語に、私はきよんとする。そんな私を見て信也さんは、教えるように話してくれた。

「俺、女の子には皆《キレイの素》があると思うんだ」
信也さんはゆつくりとオールで漕ぎ始めた。

「それは人によって全然違って、時には負けん気だったり好奇心だったり夢のためだったりするんだ」
それを聞いて私はふと思う。

——そういえばクラスにもいろんな子がいる。
友達と張り合うためにメイクを研究している子。
純粋に服が好きで自分で作ってまでオシャレをしている子。

雑誌の読者モデルになりたいくて頑張っている子。
みんなキレイになりたいきっかけは、違うんだ。

「みんなバラバラの素だから、もちろんバラバラのキレイができる。
例えば……」

そこで信也さんはニヤリと笑う。

「美央は男の子たちから虐められていて、見返したいがために今は男を魅了するようなキレイを手に入れた」

「あ……確かに」

美央のモチっぷりはハンパない。
なんてったって学年一の美少女。

美央に告白してはフラれる男子生徒を、何人か見たことがある。
けれど美央は男嫌い……ううん、なんか勿体ない気もするなあ。
そんな風に考えていると、信也さんがコホンと咳ばらいをした。

「で、次が本題ね」

少しだけ真面目な表情になって、私を見ていた視線を池の水面に移す。

あれ？

心なしか頬が赤いような……？

「咲子ちゃんはさ、自分に自信を持ちたいからキレイになりたいって言ったじゃん？俺それ聞いた時すげーいいな、て思ったんだ」

「いい？
なんでだろう……自信持ちたいからなんて、すごく自己満足なことなの。」

「話してる時の表情がいいな……てさ。この子が可愛くなる手伝いホントにしたいな、て思ったんだ」

（……！）

ドキツと胸が弾む。

え……。

だってその話した時って、私まだ魔法かけられる前だよ？

そんな私を『可愛い』って……。

「きつと、真面目に自分と向き合ってるその気持ち……《キレイの素》に惹かれたんだろうな。だんだん可愛くなる咲子ちゃんを見るのは嬉しかったよ」

そんな風に言われて、私は嬉しいやら恥ずかしいやらでどう反応しているのかわからなかった。

けれど……。

斜め下を見る信也さんが耳まで真っ赤になっていたから、何だかすぐつたい気分になってしまった。

「でさ、真面目がキレイの素の咲子ちゃんは、やっぱりキレイになるのも真面目な分吸収が早かったんだよね」

……ん？

信也さん何が言いたいんだろう。

「おかげで藤原みたいな奴が現れるわナンパはされるわで、俺はかーり、心配なわけ！」

「ナンパって……見てたんですか！？」

「ジェットコースターから手振ろうとしたら見えたの！降りたかったけどもう乗っちゃまってるし降りたら美央と観覧車行ってるし、ほ

とほと自分が情けなかったよ、俺は」

これだからフラれてばっかなんだ……と呟く信也さんだけど、いえそれは違います。美央のせいです。

（そっか、だから二人きりになりたかったのかな）

単純な頭の信也さんに、思わず笑みが零れる。

美央といい信也さんといい……まったくこの兄妹は可愛いんだから！

「だからさ、咲子ちゃん！」

信也さんがバツと前を向いた。

真正面の私は少しだけ驚き——次の台詞にますます驚いた。

「もうキレイの魔法おしまいにして！」

——え。

「ええ！？」

ちよ、ちよつと待つて！？

「そ、それはキレイにならないでってことですか？」

「んー……極端に言えばそうなの……か？」

自分でもよくわかってなさそうに信也さんは呟く。

「いや、キレイなのは嬉しい……でもそれが他の男も呼ぶもんだからで……。わかる？この男心」

うーむ、と呟く信也さん。

まるで子どもみたい。

……もう、これだから妹にまで恋愛邪魔されちゃうんだよ？

苦笑した私は、信也さんに言った。

「キレイの素は、ひとつだけじゃないですよ」

「え？」

教えてあげるよ、信也さん。

女の子にしかわからない、キレイの魔法を——。

「女の子は、恋をしたらもつとキレイになれるんです」

——それはきつと、恋する女の子なら誰もが知っている、秘密の魔法——

「だから私がキレイでいられるのは、信也さんが好きってことなんです」

キレイの一番の魔法は……恋愛なのかもしれない。
それが、私の今まで頑張ってきた答え——。

「咲子……ちゃん」

信也さんは呆然と呟く。
そして。

くしゃりと笑った。

「これじゃあどっちが魔法使いかわかんねーな」
信也さんは恥ずかしそうに微笑んだ。

「咲子ちゃんが好き過ぎて魔法使い本来の仕事を忘れてたよ。ならもつと俺は、咲子ちゃんをキレイにしてあげないとな！」

「はい、よろしく願います！」

そこにはもう、駄々っ子のような信也さんはいなかった。
いるのは私のもう一人の、キレイの魔法使い——。

「じゃあ、罪滅ぼしにひとつ魔法をかけますか」

「え？」

次の瞬間、ふつと私たちのボートが影に包まれた。

気付けば私たちは、池のまわりにある木の枝が伸びた水面下にいた。
影になったそこは涼しく、日光を塞いでくれている。

少しだけ、大人しい世界。

空間が、切り離されたような……。

ボートが、揺れた。

それは、一瞬の温もり。

一瞬の温もりは――唇に落とされた。

近くに来た信也さんの顔がまた遠退いても、私はまだ状況が掴めな
いでいた。

いや……正しくいうなら。

状況はわかっていても、気持ちがまだ追いついていなかった。

――もしかして。

――いや、もしかしなくても……今のは！

「これでまたキレイになるかな？」

また見せた悪戯っ子の表情。

瞬間、カーツと体も顔も熱くなるのがわかった。

「し、信也さん！」

キ、キスをされてしまった！

動揺する私に、信也さんはホントに嬉しそうに笑う。

「好きだよ、咲子ちゃん」

ああ、もう。

そんな嬉しそうに言われたら。

「……私も……です」

そう言わずにはられない。

もしかしたら私も結構、単純なのかもしれない。

そして。

キラキラ光る水面に映るふたつの影が、また寄り添うようになるま
で時間はかからなかったのだった。

26 咲子の秘密・美央の秘密

気付けば遊園地は、夕焼け色に染まっていた。

一通り遊び尽くした私たちは、遊園地をあとにすることにした。

……が。

「なーんかあったでしょ、咲子！」

「な、なな、ないってば」

美央と稔と合流してからずっと、こんな風にして美央に問いつめられている。

「だって合流した時咲子は真つ赤でおにいちゃん機嫌いいし……ぜったいたい何かあったでしょ！」

「うう、あとで言うからあ」

だから稔がいる今は聞かないで。

そんな風に美央と格闘している前で、信也さんと稔は仲良く喋っている。

なんだかんだで大の仲良しになっちゃったみたい、この二人。

「と、ところで美央はどうだった？稔の相手大変だったでしょ」

話題転換を狙ったふりだったが、美央は思ったよりも驚いた。

「え、み、稔くん！？」

——ん？

「別に話しやすかった……よ」

「そ、そう？」

まあレディーファーストな稔だから喋りやすいだろうな。

でも美央はなんで目をキョロキョロさせているんだろう。

それに……。

「稔くん、いい子だね」

なんか美央、キラキラしてない？

「……………」

まさか……、ね。

「なー咲子、美央ちゃん、帰りどっか食べてこーよ」
前を歩いていた稔が振り返り、私たちに話しかけた。
その瞬間美央が赤くなっただのは……多分気のせい。

——だと思いたい。

時は流れ——季節は夏。

テストも終わり、もうすぐ夏休みだという頃。

「ねえこの水着可愛くない？」

「え、派手すぎないかなあ！？」

休み時間に雑誌を広げた私と美央。

相変わらず私は美央に、キレイの魔法をかけてもらっていた。

「私胸ないしなあ……………」

しょぼんとする私に。

「大丈夫！ほら、胸の間にリボンとかついたらやつなら小さいのも目立たないらしいよ」

今日も美央は魔法をかけてくれている。自信、という名の魔法を——。

「でも楽しみだねえ、みんなで海！」

ウキウキと言う美央は本当に嬉しそうで、こっちまでウキウキしてきちゃいそう。

なんか最近美央、ますますキレイになった気がするなあ。

そんなことをふと考えていたら、あることを思い出した。

「あ、そういえば稔がね」

「えっ」

……ん？

美央過剰反応しすぎではないかい？

「稔が日にちとかどこの海にするかとか話したいから、信也さんと一緒にうち来てって」

「あ、なるほどね。うん、いいよ！」

そう言う美央がますます可愛く見えたもんだから、私の前々からの予感やはり当たっているみたいだ。

ああ……稔うゝ！

——でも。

「可愛い水着買おうね」

そう言う美央はやっぱり可愛くて。

「うん、私白がいいな」

やっぱり恋愛ってすごい、なんて思ってしまう私。

「あ、私ピンク！」

だって、女の子にこんな強烈な魔法をかけるんだから——。

……と、その時ケータイのバイブが鳴った。

見てみると信也さんからのメールだった。

何だろう。

開いて見てみると、あまりにも可愛いメッセージに口が綻ぶ。

「あれ咲子、何笑ってるの」

「んー、内緒」

「え、ずるい！」

これは私だけの秘密。

信也さんの可愛い一面を知るのは、私だけ。

そしてその秘密がますます、私にキレイの魔法をかけてくれることを知っているから——。

「咲子のケチー」

私は信也さんに恋をする。

「美央も秘密あるでしょ」

それはたったひとつの魔法。

「え、な、何が!？」

女の子ならみんな隠し持っている。

「ふふ、何だろね？」

最大に効力のあるキレイの魔法。

ほら、あなたももっているでしょう？

エピソード

私の名前は神崎咲子、十六才。

特に秀でるところもなく、平凡に毎日を過ごしてきた。

可愛くなりたいと考えていても、どうせ自分には才能がないと諦めていた。

でも、私は出会ってしまった。

最高の魔法使いに——しかも二人も。

一人は可愛い魔法使いで、私に自信をたくさんくれた。

もう一人はどこか憎めないちょっと抜けた魔法使い。

けれど私にはそれさえも愛しいんだ。

そして教えてもらったの。

魔法は自分の中にあることを——。

女の子はみんな、キレイの魔法を知っている。

あの子も。

あの子も。

みんな。

そしてその魔法は、みんな違っているの。

だからみんな違うキレイを、身にまとうているの。

それは素敵なことだと——私は思うんだ。

そして。

私も持っている、私だけのキレイの魔法。

「どしたの、咲子ちゃん？」

「えっ」

ふと見ると、信也さんが椅子に座る私を見下ろしていた。

ここはバイト先エデン。

もうすぐ、開店する時間だ。奥では店長がバタバタと準備を進めている。

休憩していた私は、近くに立つ信也さんに微笑んだ。

「もうすぐ海で楽しみだなあ、て考えてたんです」

「あ、俺も楽しみ！あと一週間だよな」

そういう信也さんは相変わらず子どもっぽくて。

好きだなあ、なんて思ってしまう。

恋をするとキレイになる、なんてよく聞くけど、案外当たってるのかもしれない……なんて考える今日この頃。

「さて、じゃあ今日も一日頑張ろうか」

「はい！」

私は今日も信也さんに、最高の魔法をかけてもらっただろう。

私だけの、秘密の魔法を……なんてね。

みんな持っている、それぞれのキレイの魔法。

——あなたのキレイの魔法は、何ですか？

《END》

エピローグ（後書き）

ついに完結いたしました！約半年に渡って執筆してきました「キレイの魔法」……いかがでしたでしょうか？初めての連載小説だったので至らない部分もあったとは思いますが、まずは書ききれた自分を褒めてあげたいです（笑）感想・評価いただけたら大変嬉しいです！！あとここだけのお知らせなのですが、近々自分の小説ホームページを開く予定です。五月始めにはオープンします！もちろんこの「キレイの魔法」も置くので、よかつたら足を運んでください！そのうち交流広場に宣伝しにお邪魔させていただこうかなあ、と図々しくも考えております（^^;）最後になりましたが、最後まで読んでくださった皆様に、最大級の感謝を送ります！ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885a/>

キレイの魔法

2010年10月21日01時21分発行